

高齢者の在宅介護における援助授受の実態解明

—主たる介護者を対象にした「介護に関するアンケート調査」により—

高 木 修 ・ 田 中 泉

Investigation on the situations of help-giving and help-receiving in elderly people's home care : “The questionnaire about care” for a main care worker.

Osamu TAKAGI, Izumi TANAKA

Abstract

This paper is based on an investigation conducted on families who are performing home care to elderly people. The study aims at clarifying the difference in the state of the care situation by family relationship. The questionnaire asked respondents to answer questions regarding “the care worker's life stage”, “relationship to their community”, “care-giving organization”, “care-receivers physical and mental ability, and how long they have been receiving care”, “care-givers present and future attitude towards providing care” etc. This investigation focused on the difference between spousal care situations and child-parent care situations by analyzing the data on 1020 topics from two geographical areas.

Among the results we found, for example, the daughters in law in a young age group, has to make care-giving compatible with child-rearing etc., so caring becomes a big burden. The child, especially the daughter, wants to use nursing-services compared with a spouse's care. Many sons consider that, during oldage, they will want to receive care from the family at his house. Many daughters consider that when they will be old age, they will want to receive care from care services at her own house. Many daughters in law consider that when they become old, they want to go into a care institution.

Keywords: nursing care for elderly people, home care, family relationship

抄 録

この研究論文は、高齢者に対して在宅介護を行っている家族を対象に行った調査に基づいている。この調査は、家族関係による介護状況の違いを明らかにすることを目的に、「介護者のライフステージ」「地域との繋がり」「介護体制」「被介護者の状態や介護期間」「介護に対する現在と将来の態度」などについての回答を求めた。この調査では、特に、配偶者間の介護状況と親子間の介護状況の違いについて検討した。2つの地域から回収した1020部の調査票のデータを対象に分析を行った。

分析の結果、例えば、若い年齢層の嫁は、子育てなどと両立させなければならず、大きな負担の中で介護している。また、子ども、特に、娘は、配偶者の介護に比べ、介護サービス業者を積極的に利用したいと思っている。多くの息子が、年をとったら自宅で家族に世話をしてもらいたいと考えているが、多くの娘は、自宅で介護サービス業者に世話をしてもらいたいと考えている。他方、多くの嫁は、施設に入所したいと考えていることが明らかとなった。

キーワード：高齢者介護 在宅介護 続柄

【問 題】

高齢化社会にあつて、2000年度より介護保険制度が始まり、今現在介護に携わっている者のみならず、社会一般の人々にも、「介護は誰もがいずれ直面する問題である」という認識が浸透してきた。このように高齢者介護に関する社会的関心が高まる中で、要介護者に加えて、介護者自身を対象にした調査が様々な団体によって行われるようになった。例えば、都道府県や市町村自治体が行う住民実態調査がある。その多くは、介護保険制度の実施を前に、福祉サービスの基盤整備をすすめる上で必要なサービス量を推計する目的から実施されている(愛知県・名古屋市、1997;東京都台東区、1999;東京都新宿区、1999他)。また、介護の当事者団体などが行う調査もあり、これは、会員の声を明らかにし、社会の注目を集め、政策提言や要望を国、自治体、関係諸機関に行うことを目的に実施されている(高齢社会をよくする女性の会、1998;健康保険組合連合会、2000他)。

これら以外にも、大学などの研究機関がいくつかの枠組みのもとで調査研究を行っている。その一つに、家族介護場面での負担を説明する最も有力な理論モデルであるストレス認知理論(Laszarus & Folkman, 1984)の検証研究がある。この理論は、環境刺激(潜在的ストレス)をどう評価するか(認知的評価)が、心理的および身体的なストレス症状の発現、あるいはコーピングを規定すると仮定している。新名(1991)は、この理論の介護研究への適用について次のように説明している。すなわち、介護場面で起こるさまざまな出来事は、介護者にとってストレスとなる可能性を持つ潜在的ストレスである。介護者が潜在的ストレスを自分にとってネガティブなものとして評価すれば、介護者に心理的ストレス症状や身体的ストレス症状が現れ、そのストレスやストレス症状に対処するために介護者はコーピングを行うとしている。このモデルにおいて、負担感、介護に関連した潜在的ストレスに対処できない程度に関する評価であり、潜在的ストレスとストレス症状とを媒介する変数と定義される。さらに、介護者の基本属性や特性(性別、年齢、体力、経済的地位、患者との関係、パーソナリティなど)、介護者がもっている内的・外的リソース(知識、体力、経済力、ソーシャルサポート、ソーシャルネットワークなど)は、介護者がどのような負担感評価を行うか、どのようなコーピングを行うかに影響するとしている。この枠組みで行われた研究には、負担感を測定するために負担感尺度を開発したもの(荒井、1998;荒井ら、1999;木之下ら、1999)や、介護者の対処方略が影響を及ぼす精神的健康度の指標として燃え尽き症候群をとりあげたもの(中谷、

1992；岡林ら、1999）などがある。また、横山（1993 a、1993 b）は、介護者の疲労状況を測定するために、労働衛生の分野で使用されている蓄積的疲労徴候調査（CFSI）を用い、要介護者の麻痺の有無や精神状態、副介護者の有無や、介護期間が疲労に影響を及ぼすことを明らかにしている。

以上のようなストレスモデルの枠組みから精神状態を従属変数にした研究では、家族のみによる介護ではなく、公的サービスを利用することによって、介護ストレスが軽減されるという議論がなされている。しかしながら、介護サービスを利用することの重要性を指摘する一方で、様々な要因によって、介護サービスの利用が妨げられているという指摘もある。唐沢（2001）は、介護利用を妨げている要因として、介護サービスシステムそのものの問題だけでなく、利用者の態度要因も重要であるとしている。冷水（1982）は、ホームヘルプサービスのニーズがあると客観的に評価された家族を対象に行った研究において、公的サービスを利用するかしないかを分ける要因として、介護期間、世帯収入、回答者（主たる介護者）の続柄をあげている。また、岡本（1989）は、代表的な在宅福祉サービスであるデイケアとショートステイに関して、サービスの認知の程度と利用状況・利用希望を質問し、社会福祉サービスの利用を希望する介護者と希望しない介護者とを分ける要因として、老人の身体的・精神的状況、介護ネットワーク、介護の負担感や社会資源の利用の積極性などをあげている。高橋（1988）は、65歳以上の老夫婦のみ世帯において妻が福祉サービスを利用したいという希望度を規定する要因の一つとして、福祉サービスの利用の対象や費用設定といった「社会福祉に対する考え」をあげている。

また、介護継続意志を従属変数にし、継続意志のあるものとないものを分ける要因を検討した研究として、藤田ら（1992）は、特に、要介護老人の在宅介護継続を困難にする要因を把握するために、3ヶ月以上の在宅介護後に施設介護希望が顕在化した特別養護老人ホーム入所申請者を対象にケースコントロール研究を行ない、介護者の年齢や家族構成、住宅状況等が影響を及ぼしていることを明らかにしている。また、坂田（1989）は、介護継続意志と介護負担感とは独立の次元であるとし、それらを組み合わせて家族介護者の状態像を4つに分け、それぞれの特性を明らかにしている。すなわち、「負担感が高く継続意志が弱い群」では、老人の歩行能力が高くかつ精神症状を伴っており、介護者の健康はすぐれず、副介護者もいない場合が多い。これに対し、「介護負担感が高く継続意志が強い群」では、老人が「寝たきり」状態にあって精神症状を併せ持ち、介護者の健康がすぐれず、副介護者もいないなどの不利な条件をもつ者が多い。前者の介護者の平均年齢は若く、介護への態度はあまり積極的でないタイプが多いのに対して、後者は年配者が多く、介護へ

の態度も積極的である者が多い。これらは、社会資源の利用意向は積極的であるのに対して、「負担感が低く継続意志が強い群」や「負担感が低く継続意志も弱い群」では、社会資源の利用意向は消極的であることを明らかにしている。

以上のように、高齢者介護に携わる家族を対象にした研究は、さまざまな立場の研究が、それぞれの領域をこえて、「老年学」という学際的な枠組みでの実践研究に発展してきている。

そもそも、介護とは、「老齢または心身障害に加え、社会的原因によって日常生活を営む上で困難な状態にある個人を対象にして、専門的な対人援助を基盤に、心身的、精神的、社会的に健康な生活の確保と成長、発達をめざし、利用者が満足できる生活の自立を図るために、生活の場面で介助、家事、健康管理などの援助を行うこと。」(「社会福祉基本用語辞典」、社会福祉実践理論学会編、川島書店、1996)と定義されている。この定義によれば、介護には、家族の行う介護、看護師や介護福祉士、ホームヘルパーなどの専門家が施設や在宅で行う介護が含まれる。その中でも、特に、家族が行う介護は、この定義に定められた援助行動が、中・長期的に継続する援助-被援助関係の中で行われるという特徴をもっている。

ところで、援助行動とは、援助を与える立場の人(援助者)と、援助を受ける立場の人(被援助者)との間に生じる対人行動のことであるが、高木(1997)は、この行動を、「他者が身体的に、また心理的に幸せになることを願い、ある程度の自己犠牲(出費)を覚悟し、人から指示、命令されたからではなく、自ら進んで(自由意志から)、意図的に他者に恩恵を与える行動である」と定義している。

高齢者介護における介護者と要介護者との間の援助-被援助関係は、元来、家族、あるいは親族の間で培われてきた人間関係の上に成り立つものである。その関係の中で、介護を要する事態に陥ると、要介護者は、自己の日常生活動作能力に応じて、ケアを受け(援助受容)、また、必要な時にケアを求める(援助要請)。また、介護する側の家族・親族も、要介護者に日常生活の介助などのケアを行う(援助授与)一方で、要介護者から、直接的に援助(支援)を受けることもある(援助受容)。また、時には、家族や親戚、友人・知人などの私的なサポートネットワークに援助を要請したり、介護サービス事業者などの公的ネットワークに対して「介護サービスの利用」を申請する形で援助要請を行うこともある。このように、高齢者介護の場面においては、介護者-要介護者の間に様々な援助の授受が行われているのである。

本研究は、高齢者介護の実態とその問題を明らかにするために、高齢者介護を社会心理

学、特に、対人行動学の観点から捉える。本論文では、特に、介護者（援助者）と要介護者（被援助者）との関係の種類、すなわち、介護者と要介護者の続柄（配偶者〔夫・妻〕、子ども〔息子・娘・嫁〕）が、介護（援助授受）のあり方におよぼす影響を検討することを目的とする。そして、本論文では、「介護」を、「日常生活を営む上で困難な状態であると認定を受けた個人（要介護者）に対して、家族が行う、日常生活を送る上で必要な介助、家事、健康管理、金銭管理などの援助」と定義する。なお、ほとんどの介護家庭では、家族の中に、特に責任を担って中心的に介護しているものがある。本論文では、そのような介護者を「主たる介護者」と位置づけ、彼らを調査対象にして、主たる介護者と要介護者との間の介護（援助授受）の実態を明らかにする。

高木（1982）は、援助行動の分類学的研究を通じて、援助行動を3つの状況特性、すなわち、「個人的規範の指示」「社会的規範の指示」「援助出費の大きさ」によって特徴づけることができるとしている。そこで、それらの特性によって「高齢者介護」という援助行動の状況特性を見てみることにする。

まず、高齢者介護場面の状況特性を「個人的規範の指示」から検討する。介護に関する個人的規範意識とは、介護を必要とする状態に陥っている家族を自分自身が助ける（介護する）べきだとする道徳的責任性をどの程度感じるかということである。これは、まず、自分と相手との関係、すなわち続柄によって左右されると思われる。例えば、配偶者間で介護関係を形成している場合、要介護者にとっての配偶者は自分一人であるので、もし、自分の配偶者が要介護状態になった場合、自分が主たる介護者になることは、当然のこととして受け入れられるだろう。しかし、これが世代間の介護関係となると事情は異なってくる。そこには、それまでの家族関係が大きく影響する。単に、要介護者との関係のみならず、きょうだいやその配偶者など、他の様々な人間関係が絡んでくる。旧民法では、財産相続権は男子の年長者、すなわち長男のみにあり、親世代との同居、介護は一体となって長男の役目と確定している（春日 2001）。こうした「家」制度は、今日では廃止されているが、介護する以前から親と同居して家族関係を形成している介護者も少なくない。そのような家族の中で行われる介護と、それまでは別の家族であった子世代家族が、それぞれの家族・親族の事情により、途中で同居して、あるいは、別居状態で行う介護とでは、大きく異なるであろう。こうした状況を考えて、本研究では、続柄や家族の居住形態といった、家族のあり方を踏まえた分析を行うことにした。

次に、「社会的規範からの指示」から高齢者介護場面の状況特性を検討する。社会的規範とは、他者期待の自己意識である。すなわち、ある状況においてある行為の実行の期待を

自己にとって重要な他者が共有していることを、潜在的行為者が認識しているかどうかのことである(高木1992)。高齢者介護、すなわち、主たる介護者として要介護者の介護・世話をするということは、誰からも期待され、賞賛される行為であろう。「人間として、困難な状況にある者に手を貸すのは当たり前であり、それが家族であればなおさらである。」という考え方は、社会的に広く承認をうけるものである。また、「老親の介護は美德」という社会的風潮も存在する。このように、一般的に、家族介護に対する社会的規範は明確であるといえよう。ところで、高木(1992)は、援助行動の育成・促進に、規範や価値が大きな影響を及ぼし、また、その規範や価値というものは文化によって規定されるものであるとしている。介護保険制度においても、地域の実情にあわせたサービスの充実を図るために、県の指導の下に、区市町村が保険者となって制度の運営や基盤整備がなされるようになった。したがって、高齢者の介護場面は、地域が持つ文化・風土の特性を反映して複数の地域間で違いがあることが推察される。こうした状況を考えて、本研究では、同一県内における複数地域からのデータ収集を試みた。データ収集地域として、比較的都市化するんでいる地域と、そうではない伝統的な周辺地域を選んである。

最後に、高齢者介護場面の状況特性を「援助出費の大きさ」から検討する。家族の日常的な営みとして行われる介護は、家事労働のひとつと考えられる。また、中・長期的に継続するものであり、終わりの見えない持続性の高い援助コストを伴う。労力を要する肉体的負担に加え、時間的な制約やいつまで続くか分からないなどの精神的負担、また、経済的な負担をも覚悟しなければならない、非常に大きい援助コストを伴う家事労働である。介護者と要介護者が家族関係にある以上、家族が要介護状態になった時、在宅で介護しても、入院や施設入所になったとしても、介護は継続するが、援助コストの大きさは、要介護者の居住場所、すなわち、在宅か施設入所かで異なると考えられる。こうした状況を考えて、本研究では、特に、対象を在宅介護家族に限定した。

本論文では、介護実態を解明する第一歩として、介護を「夫」と「妻」の間での「配偶者間介護」と、「親」と実の「子」や義理の「子」(息子、娘、嫁)の間での「親子間介護」とに分け、それぞれの続柄における介護実態の特徴を明らかにすることに焦点を当てた。

【方 法】

調査対象者

介護保険の利用対象者である要介護者を家庭で主として介護している家族(主介護者)

調査期間

平成13年10月～平成14年2月

調査対象地域

滋賀県内の3市18町。比較的、都市化の進んだ地域として、県庁所在地である大津市を設定した。また、伝統的な周辺地域として、湖東地域振興局・彦根保健所管内の彦根市・愛東町・湖東町・秦荘町・愛知川町・甲良町・多賀町を設定した。同じく周辺地域として、隣接する湖北地域振興局・長浜保健所管内の長浜市・米原町・近江町・山東町・伊吹町・浅井町・虎姫町・びわ町・湖北町・高月町・木之本町・余呉町・西浅井町を設定した。

調査方法

上記の調査期間に、介護保険の新規・更新を申請しにやってきた者のうち、主たる介護者が明らかである場合に、自治体の介護保険窓口の担当職員が調査票を配布した。回収は、記入後に回答者自身の手で、返信用封筒（宛先、関西大学）を用いて返送することによって行った。

調査票の構成

調査票は、(1)介護の実態(A～F)、(2)介護に対する主介護者の態度と行動(G)、(3)介護保険の利用状況と制度満足度(H)、(4)将来の介護について(L)、(5)日頃の介護についての感想やアンケートについての意見(J)、から構成されている（Table 1-0）。本報では、(1)介護の実態を第1部で、(2)介護に対する主介護者の態度と行動と、(4)将来の介護についてを第2部で報告する。

調査実績

調査票の配布数は2873部であり、1034部の返送があった（回収率35.6%）。そのうち10票は調査対象者の条件に合わなかったので無効とし、最終的に1024部が有効票となった。さらに、回答に不備のない、在宅で介護している、797名を分析対象者とした。

第1部 現在の在宅介護の実態

【目的】

第1部では、家庭における介護の実態を、(1)主たる介護者の基本的属性、(2)家庭と地域とのつながり、(3)介護体制、(4)介護状況、などから明らかにする。

【結果】

(1)主介護者の基本属性（Table 1-1）

介護は、個人、あるいは家族の発達段階の中で生じる家事労働であり、これは出産や育

Table 1-0 調査票の質問項目

A. 居住地域	問 00 郵便番号
B. 主介護者の基本属性	問 01 性別
	年齢
	末子の扶養状況
	問 02 勤務状況勤務状況
C. 主介護者の生活状況	問 03 健康状態
	問 04 居住年数
	問 05 近所づきあいの程度
D. 介護状況	問 06 主介護者と要介護者の続柄
	介護態勢（介護に関わっている人たち）
	問 07 主介護者の介護期間
E. 要介護者の生活状況	問 08 生活場所
	問 12 要介護者の居住形態
	12-1 <同居の場合>夕食状況
F. 要介護者の精神的・身体的状態	問 09 痴呆の程度
	問 10 要介護度
	問 11 要介護度の容認
G. 介護に関する主介護者の態度と行動	問 13 介護理由
	問 18 介護についての感想
	問 14 介護上の注意
	問 15 介護上の問題
	問 16 介護についての満足最大理由
	問 17 介護継続の条件
H. 介護保険制度について	問 19 介護保険の利用状況
	19-1-1 <限度額まで利用していない場合>その理由
	19-2 <非利用の場合>その理由
	問 20 介護保険制度の満足度
I. 将来の介護	問 21 自分が介護できなくなったときの介護予想
	問 22 自分自身の被介護意向
	問 23 老後を楽しく生きるための必要条件
J. 日頃の介護についての感想やアンケートについての意見	

児・結婚などと同様に、ライフイベントの一つとして位置づけられるものである。こうしたライフステージには、次のようなステップが考えられる。すなわち、(1)扶養され教育を受ける段階、(2)社会的に自立し、生産活動に従事し、次世代をはぐくむ段階、(3)それぞれの社会的な役割からリタイアする段階、(4)介護を必要とする段階である。ここでは、【末子との扶養関係】【就労状況】【健康状態】から、介護が介護者のライフステージのどの段階にあるかについて検討した。

まず、主介護者を年齢によって、① 50歳未満（若年齢層）、② 50歳以上 65歳未満（中

高齢者の在宅介護における援助授受の実態解明（高木・田中）

Table 1-1 基本属性

基本属性	配偶者間		配偶者合計	親子間			親子合計	全体合計								
	1 夫	2 妻		3 息子	4 娘	5 嫁										
性別																
1 男性	79	100.0%	79	29.2%	55	100.0%	55	10.5%	134	100.0%						
2 女性			192	100.0%	192	70.8%	197	100.0%	274	100.0%	471	89.5%	663	100.0%		
回答者の年齢																
1 40歳未満						3	5.5%	8	4.1%	14	5.1%	25	4.8%	25	3.1%	
2 40歳以上50歳未満			5	2.6%	5	1.8%	11	20.0%	27	13.7%	74	27.0%	112	21.3%	117	14.7%
3 50歳以上65歳未満	5	6.3%	39	20.3%	44	16.2%	31	56.4%	136	69.0%	161	58.8%	328	62.4%	372	46.7%
4 65歳以上70歳未満	13	16.5%	36	18.8%	49	18.1%	6	10.9%	14	7.1%	10	3.6%	30	5.7%	79	9.9%
5 70歳以上75歳未満	22	27.8%	46	24.0%	68	25.1%	2	3.6%	4	2.0%	7	2.6%	13	2.5%	81	10.2%
6 75歳以上	38	48.1%	61	31.8%	99	36.5%	2	3.6%	8	4.1%	7	2.6%	17	3.2%	116	14.6%
9 無回答	1	1.3%	5	2.6%	6	2.2%					1	0.4%	1	0.2%	7	0.9%
あなたと末子との扶養関係																
1 中学生以下			3	1.6%	3	1.1%	8	14.5%	14	7.1%	42	15.3%	64	12.2%	67	8.4%
2 高校等以上の学校	2	2.5%	5	2.6%	7	2.6%	6	10.9%	29	14.7%	51	18.6%	86	16.3%	93	11.7%
3 上記以外	7	8.9%	14	7.3%	21	7.7%	4	7.3%	18	9.1%	26	9.5%	48	9.1%	69	8.7%
4 扶養を離れている	52	65.8%	120	62.5%	172	63.5%	21	38.2%	91	46.2%	133	48.5%	245	46.6%	417	52.3%
5 子どもはいない	5	6.3%	10	5.2%	15	5.5%	15	27.3%	37	18.8%	7	2.6%	59	11.2%	74	9.3%
6 その他	5	6.3%	12	6.3%	17	6.3%			2	1.0%	4	1.5%	6	1.1%	23	2.9%
9 無回答	8	10.1%	28	14.6%	36	13.3%	1	1.8%	6	3.0%	11	4.0%	18	3.4%	54	6.8%
就労状況																
1 フルタイム	6	7.6%	4	2.1%	10	3.7%	19	34.5%	28	14.2%	33	12.0%	80	15.2%	90	11.3%
2 パート	2	2.5%	8	4.2%	10	3.7%	2	3.6%	30	15.2%	41	15.0%	73	13.9%	83	10.4%
3 自営業	4	5.1%	10	5.2%	14	5.2%	10	18.2%	29	14.7%	47	17.2%	86	16.3%	100	12.5%
4 無職	63	79.7%	164	85.4%	227	83.8%	22	40.0%	105	53.3%	149	54.4%	276	52.5%	503	63.1%
5 農業	2	2.5%	4	2.1%	6	2.2%	1	1.8%	3	1.5%	3	1.1%	7	1.3%	13	1.6%
6 その他	2	2.5%	1	0.5%	3	1.1%			1	0.5%			1	0.2%	4	0.5%
9 無回答			1	0.5%	1	0.4%	1	1.8%	1	0.5%	1	0.4%	3	0.6%	4	0.5%
回答者の健康状態																
1 病気障害なく普通に生活	29	36.7%	67	34.9%	96	35.4%	44	80.0%	130	66.0%	194	70.8%	368	70.0%	464	58.2%
2 病気障害あるがほぼ自立	41	51.9%	94	49.0%	135	49.8%	8	14.5%	57	28.9%	65	23.7%	130	24.7%	265	33.2%
3 病気障害あり一人で外出は不可	4	5.1%	11	5.7%	15	5.5%			4	2.0%	5	1.8%	9	1.7%	24	3.0%
4 日常生活外出不都合あり	5	6.3%	18	9.4%	23	8.5%	2	3.6%	5	2.5%	9	3.3%	16	3.0%	39	4.9%
9 無回答			2	1.0%	2	0.7%	1	1.8%	1	0.5%	1	0.4%	3	0.6%	5	0.6%
合計	79	100.0%	192	100.0%	271	100.0%	55	100.0%	197	100.0%	274	100.0%	526	100.0%	797	100.0%

Table 1-2 続柄別 年齢層の内訳

年齢層	配偶者間				配偶者合計		親子間						親子合計		全体合計	
	1夫		2妻				3息子		4娘		5嫁					
1 若年齢層 (50歳未満)	0	0.0%	5	2.7%	5	2%	14	25.5%	35	17.8%	88	32.2%	137	26.1%	142	18.0%
2 中年年齢層 (50歳～64歳)	5	6.4%	39	20.9%	44	16.6%	31	56.4%	136	69.0%	161	59.0%	328	62.5%	372	47.1%
3 高年齢層 (65歳以上)	73	93.6%	143	76.5%	216	81.5%	10	18.2%	26	13.2%	24	8.8%	60	11.4%	276	34.9%
合計	78	100.0%	187	100.0%	265	100.0%	55	100.0%	197	100.0%	273	100.0%	525	100.0%	790	100.0%

年齢層)、③65歳以上(高年齢層)の3群に分類し、各層の特徴を概観する(Table 1-2)。

高年齢層では、「夫」と「妻」といった配偶者間で介護している者の率が81.5%と高く、それ以下の年齢層では、親子間で介護している者の比率が88.6%と高い。特に、中年年齢層では、「娘」の比率が69.0%と高いのに対して、若年齢層では、「嫁」の比率が32.2%と比較的高い。

配偶者間で介護関係を形成している「夫」と「妻」の特徴を基本属性から検討すると、「夫」と「妻」は、末子の扶養を終えて(63.5%)、無職のものが多く(83.8%)、健康状況では、約半数(49.8%)が「病気障害はあるがほぼ自立」としており、「病気障害なく普通に生活している」者も35.4%とこれに次いで多いことなどが分かった。

さらに、「夫」と「妻」の介護状況の差異を明らかにするために、まず、【末子の扶養状況】【就労状況】【健康状態】のそれぞれの項目について次のようなまとめを行った。すなわち、【末子の扶養状況】については、「1 中学生以下」「2 高校等以上の学校」「3 上記以外」を「扶養」に、「4 扶養を離れている」と「5 子どもはいない」を「扶養せず」に分類し、「6 その他」と「9 無回答」を分析対象から除外した。【就労状況】については、「1 フルタイム」「2 パート」「3 自営業」「5 農業」を「就労」に、「4 無職」を「就労せず」に分類し、「6 その他」と「9 無回答」を分析対象から除外した。【健康状態】については、「1 病気障害なく普通に生活」を「病気障害無し」に、「2 病気障害あるがほぼ自立」「3 病気障害あり一人で外出は不可」「4 日常生活外出不都合あり」を「病気障害あり」に分類し、「9 無回答」を分析対象から除外した。そして、この上で、「夫」と「妻」の介護状況の差異を χ^2 検定で検討した。その結果(Table 1-3-1～Table 1-3-3)、65歳以上の高年齢層の場合、【就労】においてのみ、「夫」の方が妻より就労率が高い傾向($\chi^2(1)=3.00 p<.10$)が見られたが、65歳未満の若および中年年齢層の場合、有意な差異は見られなかった。すなわち、65歳未満においては、介護に当たる夫と妻の間に基本属性の違いはないことが分かった。

次に、親子間で介護関係を形成している「息子」「娘」「嫁」の間に差異があるかどうか

高齢者の在宅介護における援助授受の実態解明（高木・田中）

Table 1-3-1 年齢別末子の扶養状況（配偶者比較）

扶養状況	1 65歳未満					2 65歳以上						
	1夫		2妻		小計	1夫		2妻		小計		
1 扶養	0	0.0%	10	26.3%	10	23.8%	9	14.8%	12	10.8%	21	12.2%
2 扶養せず	4	100.0%	28	73.7%	32	76.2%	52	85.2%	99	89.2%	151	87.8%
合計	4	100.0%	38	100.0%	42	100.0%	61	100.0%	111	100.0%	172	100.0%

Table 1-3-2 年齢別就労状況（配偶者比較）

就労状況	1 65歳未満					2 65歳以上						
	1夫		2妻		小計	1夫		2妻		小計		
1 就労	3	60.0%	15	34.1%	18	36.7%	11	15.5%	11	7.8%	22	10.4%
2 就労せず	2	40.0%	29	65.9%	31	63.3%	60	84.5%	130	92.2%	190	89.6%
合計	5	100.0%	44	100.0%	49	100.0%	71	100.0%	141	100.0%	212	100.0%

Table 1-3-3 年齢別健康状態（配偶者比較）

健康状態	1 65歳未満					2 65歳以上						
	1夫		2妻		小計	1夫		2妻		小計		
1 病気障害なし	3	60.0%	28	63.6%	31	63.3%	26	35.6%	39	27.7%	65	30.4%
2 病気障害あり	2	40.0%	16	36.4%	18	36.7%	47	64.4%	102	72.3%	149	69.6%
合計	5	100.0%	44	100.0%	49	100.0%	73	100.0%	141	100.0%	214	100.0%

を明らかにするために、【年齢】では、先述の65歳以下の年齢層を、さらに、50歳未満と50歳以上65歳未満とに分け、【末子の扶養状況】【就労状況】【健康状態】は前のように2分して、 χ^2 検定を行った。その結果（Table 1-4-1～Table 1-4-3）、50歳未満の若年齢層の場合、【末子の扶養状況】で有意差が見られ（ $\chi^2(2)=6.06$ p<.05）、残差分析を行ったところ、「嫁」の扶養率（85.9%）が高かった（ $d=2.4$ p<.05）。【就労状況】では、有意差は認められなかった。【健康状態】については、さらに、続柄を実子（息子・娘）と義理（嫁）に分けて χ^2 検定を行った結果、有意な差異が見られ（ $\chi^2(1)=3.98$ p<.05）、「嫁」が「病気障害あり」とする率（26.1%）が高かった（Table 1-4-4）。他方、50歳以上65歳未満の中年年齢層の場合、【末子の扶養状況】と【就労状況】では有意な差は認められなかったが、【健康状態】では有意差が認められ（ $\chi^2(2)=7.04$ p<.05）、残差分析を行ったところ、「娘」の「病気障害あり」とする率（37.8%）が高かった（ $d=2.3$ p<.05）。なお、65歳以上の高年齢層の場合、有意な差異は認められなかった。

配偶者間の介護関係と親子間の介護関係の間に見られる差異を明らかにするために、「65歳未満」と「65歳以上」の2群に分け、【末子の扶養状況】【就労状況】【健康状態】では前のように2分して、 χ^2 検定を行った。その結果（Table 1-5-1～Table 1-5-3）、65歳未満

Table 1-4-1 年齢別末子の扶養状況（親子間比較）

扶養状況	1 50歳未満				2 50歳以上65歳未満				3 65歳以上			
	3息子	4娘	5嫁	小計	3息子	4娘	5嫁	小計	3息子	4娘	5嫁	小計
1 扶養	9 64.3%	23 69.7%	73 85.9%	105 79.5%	8 26.7%	35 26.7%	43 28.3%	86 27.5%	1 10.0%	3 12.0%	3 14.3%	7 12.5%
2 扶養せず	5 35.7%	10 30.3%	12 14.1%	27 20.5%	22 73.3%	96 73.3%	109 71.7%	227 72.5%	9 90.0%	22 88.0%	18 85.7%	49 87.5%
合計	14 100.0%	33 100.0%	85 100.0%	132 100.0%	30 100.0%	131 100.0%	152 100.0%	313 100.0%	10 100.0%	25 100.0%	21 100.0%	56 100.0%

Table 1-4-2 年齢別就労状況（親子間比較）

就労状況	1 50歳未満				2 50歳以上65歳未満				3 65歳以上			
	3息子	4娘	5嫁	小計	3息子	4娘	5嫁	小計	3息子	4娘	5嫁	小計
1 就労	13 92.9%	24 68.6%	58 65.9%	95 69.3%	15 50.0%	61 45.2%	61 38.1%	137 42.2%	4 40.0%	5 20.0%	5 20.8%	14 23.7%
2 就労せず	1 7.1%	11 31.4%	30 34.1%	42 30.7%	15 50.0%	74 54.8%	99 61.9%	188 57.8%	6 60.0%	20 80.0%	19 79.2%	45 76.3%
合計	14 100.0%	35 100.0%	88 100.0%	137 100.0%	30 100.0%	135 100.0%	160 100.0%	325 100.0%	10 100.0%	25 100.0%	24 100.0%	59 100.0%

Table 1-4-3 年齢別健康状態（親子間比較）

健康状態	1 50歳未満				2 50歳以上65歳未満				3 65歳以上			
	3息子	4娘	5嫁	小計	3息子	4娘	5嫁	小計	3息子	4娘	5嫁	小計
1 病気障害なし	14 100.0%	30 85.7%	65 73.9%	109 79.6%	26 83.9%	84 62.2%	116 72.5%	226 69.3%	4 44.4%	16 61.5%	12 50.0%	32 54.2%
2 病気障害あり		5 14.3%	23 26.1%	28 20.4%	5 16.1%	51 37.8%	44 27.5%	100 30.7%	5 55.6%	10 38.5%	12 50.0%	27 45.8%
合計	14 100.0%	35 100.0%	88 100.0%	137 100.0%	31 100.0%	135 100.0%	160 100.0%	326 100.0%	9 100.0%	26 100.0%	24 100.0%	59 100.0%

Table 1-4-4 年齢別健康状態（50歳未満）

健康状態	1 50歳未満					
	1実子(息子・娘)		2嫁		小計	
1 病気障害なし	44	89.8%	65	73.9%	109	79.6%
2 病気障害あり	5	10.2%	23	26.1%	28	20.4%
合計	49	100.0%	88	100.0%	137	100.0%

の場合、【末子の扶養状況】と【就労状況】で有意な差異が認められ、【末子の扶養状況】では、親子間介護では「扶養」の率が(42.9%)、配偶者間介護では「扶養せず」の率(76.2%)が高かった($\chi^2(1)=5.78$ $p<.05$)。また、【就労状況】では、親子間介護においては「就労」の率(50.2%)が、配偶者間介護においては「就労せず」の率(63.3%)が高い傾向($\chi^2(1)=3.22$ $p<.10$)が認められた。他方、65歳以上の場合、【末子の扶養状況】では有意な差はみられなかったが、【就労状況】では有意な差が得られ、親子間介護では「就労」の率が(23.7%)、配偶者間介護では「就労せず」の率(89.6%)が高かった($\chi^2(1)=7.14$ $p<.01$)。また、【健康状態】では有意な結果が得られ、親子間介護では「病気障害なし」の率(54.2%)が、配偶者間介護では「病気障害あり」とする率(69.6%)が高かった($\chi^2(1)=11.49$ $p<.01$)。

高齢者の在宅介護における援助授受の実態解明（高木・田中）

Table 1-5-1 年齢別末子の扶養状況（配偶者と親子間の比較）

扶養状況	1 65歳未満						2 65歳以上					
	配偶者間		親子間		小計		配偶者間		親子間		小計	
1 扶養	10	23.8%	191	42.9%	201	41.3%	21	12.2%	7	12.5%	28	12.3%
2 扶養せず	32	76.2%	254	57.1%	286	58.7%	151	87.8%	49	87.5%	200	87.7%
合計	42	100.0%	445	100.0%	487	100.0%	172	100.0%	56	100.0%	228	100.0%

Table 1-5-2 年齢別就労状況（配偶者と親子間の比較）

就労状況	1 65歳未満						2 65歳以上					
	配偶者間		親子間		小計		配偶者間		親子間		小計	
1 就労	18	36.7%	232	50.2%	250	48.9%	22	10.4%	14	23.7%	36	13.3%
2 就労せず	31	63.3%	230	49.8%	261	51.1%	190	89.6%	45	76.3%	235	86.7%
合計	49	100.0%	462	100.0%	511	100.0%	212	100.0%	59	100.0%	271	100.0%

Table 1-5-3 年齢別健康状態（配偶者と親子間の比較）

健康状態	1 65歳未満						2 65歳以上					
	配偶者間		親子間		小計		配偶者間		親子間		小計	
1 病気障害なし	31	63.3%	335	72.4%	366	71.5%	65	30.4%	32	54.2%	97	35.5%
2 病気障害あり	18	36.7%	128	27.6%	146	28.5%	149	69.6%	27	45.8%	176	64.5%
合計	49	100.0%	463	100.0%	512	100.0%	214	100.0%	59	100.0%	273	100.0%

(2) 家庭と地域とのつながりについて

【居住年数】と【近所づきあいの程度】から、配偶者間で介護関係を形成している「夫」と「妻」の特徴を概観する（Table 2-1-1）。

【居住年数】については、「夫」（46.8％）と「妻」（39.1％）ともに、「40年以上」とする率が高くなる。また、【近所づきあいの程度】については、「夫」（49.4％）と「妻」（63.0％）ともに、「助け合える程度」とする率が最も高くなっている。つぎに、【居住年数】を「30年未満」と「30年以上」に、【近所づきあいの程度】を「助け合える程度」と「それ以外」に分類して、「夫」と「妻」の介護状況の違いを χ^2 検定で確かめた結果、【居住年数】では（Table 2-2-1）、有意な差異は見られず、【近所づきあいの程度】では（Table 2-2-2）、「妻」が「助け合う程度」とする率（63.4％）が「夫」のそれ（50.0％）よりも高い傾向が見られた（ $\chi^2(1)=3.56 p<.10$ ）。すなわち、「夫」と「妻」では、居住年数についての差異はないが、近所づきあいでは「妻」の方が「夫」にくらべて「助け合う程度」の親密な付き合いを一層している傾向のあることが明らかになった。

親を介護している「息子」「娘」「嫁」の介護状況における差異を明らかにするために、【居住年数】と【近所づきあいの程度】を先述のように2分し、 χ^2 検定を行った結果、【現

Table 2-1-1 地域とのつながり (居住年数・近所づきあい)

地域とのつながり	配偶者間				配偶者合計	親子間						親子合計	全体合計			
	1夫		2妻			3息子		4娘		5嫁						
現住所の居住年数																
1 5年未満	8	10.1%	14	7.3%	22	8.1%	4	7.3%	22	11.2%	11	4.0%	37	7.0%	59	7.4%
2 5年～10年未満	3	3.8%	15	7.8%	18	6.6%	4	7.3%	14	7.1%	20	7.3%	38	7.2%	56	7.0%
3 10年～20年未満	6	7.6%	20	10.4%	26	9.6%	8	14.5%	37	18.8%	55	20.1%	100	19.0%	126	15.8%
4 20年～30年未満	13	16.5%	35	18.2%	48	17.7%	10	18.2%	49	24.9%	96	35.0%	155	29.5%	203	25.5%
5 30年～40年未満	11	13.9%	31	16.1%	42	15.5%	6	10.9%	22	11.2%	75	27.4%	103	19.6%	145	18.2%
6 40年以上	37	46.8%	75	39.1%	112	41.3%	23	41.8%	53	26.9%	16	5.8%	92	17.5%	204	25.6%
9 無回答	1	1.3%	2	1.0%	3	1.1%					1	0.4%	1	0.2%	4	0.5%
近所づきあいの程度																
1 助け合う程度	39	49.4%	121	63.0%	160	59.0%	31	56.4%	94	47.7%	168	61.3%	293	55.7%	453	56.8%
2 あいさつや立ち話程度	31	39.2%	65	33.9%	96	35.4%	18	32.7%	93	47.2%	99	36.1%	210	39.9%	306	38.4%
3 ほとんどない	8	10.1%	5	2.6%	13	4.8%	6	10.9%	6	3.0%	6	2.2%	18	3.4%	31	3.9%
4 その他			1	0.5%	1	0.4%			2	1.0%			2	0.4%	3	0.4%
9 無回答	1	1.3%			1	0.4%			2	1.0%	1	0.4%	3	0.6%	4	0.5%
合計	79	100.0%	192	100.0%	271	100.0%	55	100.0%	197	100.0%	274	100.0%	526	100.0%	797	100.0%

在の居住年数】において (Table 2-2-1)、有意な差が見られ ($\chi^2(2)=7.49 p<.05$)、残差分析を行ったところ、「息子」では、「30年以上」とする率(52.7%)が高く ($d=2.5 p<.01$)、「嫁」では、「30年未満」とする率(66.7%)が高かった ($d=1.9 p<.05$)。また、【近所づきあいの程度】においても (Table 2-2-2)、有意な差が見られ ($\chi^2(2)=7.56 p<.05$)、残差分析を行ったところ、「嫁」では、「助け合う程度」とする率(61.5%)が高く ($d=2.6 p<.01$)、「娘」では、「それ以外」とする率(51.3%)が高かった ($d=2.7 p<.01$)。すなわち、「息子」は居住年数が「30年以上」と比較的長く住み慣れたところで介護することが多く、「嫁」は「30年未満」と比較的新しく住んだところで介護することが多い。また、近所づきあいの程度では、「嫁」は「助け合える程度」といった、比較的親密な近所付き合いの中で介護することが多く、「娘」は、比較的疎遠な近所関係の中で介護することが多いということが明らかになった。

配偶者間の介護関係と親子間の介護関係の間に見られる差異を明らかにするために、【居住年数】と【近所づきあいの程度】を先述のように2分して、 χ^2 検定を行った結果、【居住年数】においては (Table 2-2-1)、有意な差が見られ ($\chi^2(1)=28.91 p<.001$)、配偶者間介護で「30年以上」とする率(57.5%)が高く、親子間介護では「30年未満」とする率(62.9%)が高かった。なお、【近所づきあいの程度】では (Table 2-2-2)、有意な差は認められなかった。

高齢者の在宅介護における援助授受の実態説明（高木・田中）

Table 2-2-1 居住年数

居住年数	配偶者間				配偶者合計		親子間					親子合計		全体合計		
	1 夫		2 妻				3 息子		4 娘		5 嫁					
1 30年未満	30	38.5%	84	44.2%	114	42.5%	26	47.3%	122	61.9%	182	66.7%	330	62.9%	444	56.0%
2 30年以上	48	61.5%	106	55.8%	154	57.5%	29	52.7%	75	38.1%	91	33.3%	195	37.1%	349	44.0%
合計	78	100.0%	190	100.0%	268	100.0%	55	100.0%	197	100.0%	273	100.0%	525	100.0%	793	100.0%

Table 2-2-2 近所づきあいの程度

近所づきあい	配偶者間				配偶者合計		親子間					親子合計		全体合計		
	1 夫		2 妻				3 息子		4 娘		5 嫁					
1 助け合う程度	39	50.0%	121	63.4%	160	59.5%	31	56.4%	94	48.7%	168	61.5%	293	56.2%	453	57.3%
2 それ以外	39	50.0%	70	36.6%	109	40.5%	24	43.6%	99	51.3%	105	38.5%	228	43.8%	337	42.7%
合計	78	100.0%	191	100.0%	269	100.0%	55	100.0%	193	100.0%	273	100.0%	521	100.0%	790	100.0%

Table 2-3 居住年数別近所づきあいの程度

地域とのつながり	配偶者間				配偶者合計		親子間					親子合計		全体合計		
	1 夫		2 妻				3 息子		4 娘		5 嫁					
【居住年数】30年未満																
1 助け合う程度	7	23.3%	39	47.0%	46	40.7%	9	34.6%	53	43.8%	102	56.0%	164	49.8%	210	47.5%
2 それ以外	23	76.7%	44	53.0%	67	59.3%	17	65.4%	68	56.2%	80	44.0%	165	50.2%	232	52.5%
合計	30	100.0%	83	100.0%	113	100.0%	26	100.0%	121	100.0%	182	100.0%	329	100.0%	442	100.0%
【居住年数】30年以上																
1 助け合う程度	32	68.1%	80	75.5%	112	73.2%	22	75.9%	41	56.9%	65	72.2%	128	67.0%	240	69.8%
2 それ以外	15	31.9%	26	24.5%	41	26.8%	7	24.1%	31	43.1%	25	27.8%	63	33.0%	104	30.2%
合計	47	100.0%	106	100.0%	153	100.0%	29	100.0%	72	100.0%	90	100.0%	191	100.0%	344	100.0%

ところで、「居住年数」と「近所づきあい」の間には、何らかの関係があり、しかも、介護者と要介護者との続柄によってそれが異なることが考えられる。そこで、居住年数別に、すなわち「30年未満」と「30年以上」で、近所づきあいの程度の回答傾向に違いがあるかどうかを分析した。その結果、配偶者間介護の場合、【居住年数】が「30年未満」の者（Table 2-3 上段）では、「夫」と「妻」の間で【近所づきあいの程度】に有意な差異が見られた($\chi^2(1)=4.17 p<.05$)。すなわち、「妻」は「助け合う程度」の付き合いとする率(47.0%)が高く、「夫」は「それ以外」とする率(76.7%)が高かった。なお、【居住年数】が「30年以上」の者（Table 2-3 下段）では、「夫」と「妻」の間で有意な差は認められなかった。

他方、親子間介護の場合、【居住年数】が「30年未満」の者（Table 2-3 上段）では、「息子」「娘」「嫁」の間で【近所づきあいの程度】に有意な差異が見られ($\chi^2(2)=6.97 p<.05$)、

残差分析を行った結果、「嫁」は「助け合う程度」の付き合いとする率(56.0%)が高く($d=2.5 p<.05$)、「息子」(65.4%) ($d=-1.6 p<.10$)と、「娘」(56.2%) ($d=-1.7 p<.10$)は「それ以外」とする率が高い傾向が見られた。【居住年数】が「30年以上」と回答した者(Table 2-3 下段)では、「息子」「娘」「嫁」の間で【近所づきあいの程度】に有意な差の傾向が見られ($\chi^2(2)=5.43 p<.10$)、残差分析を行った結果、「娘」は「それ以外」とする率(43.1%)が高かった($d=2.3 p<.05$)。

配偶者間の介護関係と親子間の介護関係の間に見られる差異を検討するために χ^2 検定を行った結果、【居住年数】が「30年未満」と回答した者でも「30年以上」と回答した者でも、有意な差は見られなかった。

(3) 介護体制について

各家庭における介護が、どのような体制のもとで行われているかを、主たる介護者以外に介護に関わっている人物がいるか【回答者以外の介護者】および【居住形態】から検討した。さらに、同居者の生活状況を把握するために、【夕食状況】も尋ねた。

まず、【回答者以外の介護者】については、次の2点から分析を行った。第一は、主たる介護者以外に誰が介護に関わっているかという分析である。これは、選択された項目の度数分布を検討することによって行った。第二は、どのような体制のもとで介護を行っているかという分析である。回答者(自分)以外に介護参加者がいない場合、すなわち単独で介護を行っている場合もあるだろうし、様々なネットワークを利用して介護を行っている場合もあるだろう。さらに、そのような介護体制が介護関係(続柄)によって違っているかどうかを検討した。

第一分析では、主たる介護者が「夫」の場合、最も多くあげられた介護参加者は本人の「娘」(38.0%)であった。他方、主たる介護者が「妻」の場合、本人の「息子」(30.2%)が参加者として最も多くあげられていた(Table 3-1-1:上段)。そこで、あげられた介護参加者に有意差があるかどうかを確かめるために、全体として2割以上の選択があった「(3)本人の子ども(息子)」「(4)本人の子ども(娘)」「(5)息子の配偶者(嫁)」「(13)ホームヘルパー」について、 χ^2 検定を行った。その結果、主たる介護者が「妻」の場合に、「夫」の場合よりも、回答者以外の介護者として「(3)本人の子ども(息子)」が有意に多く選択されていた($\chi^2(1)=4.78 p<.05$)が、これ以外の介護参加者においては、有意差はみられなかった。

つぎに、親子間で介護している場合を見ると、最も多く選択されているのは、「息子」が主たる介護者の場合は「息子の配偶者(嫁)」(54.5%)、「娘」が主たる介護者の場合は「娘

Table 3-1-1 介護体制 (1)【回答者以外の介護者】

介護体制	配偶者間		配偶者合計	親子間			親子合計	全体合計							
	1 夫	2 妻		3 息子	4 娘	5 嫁									
回答者以外の介護者															
1 配偶者（夫）						16	8.1%	35	12.8%	51	9.7%	51	6.4%		
2 配偶者（妻）						9	16.4%	10	5.1%	14	5.1%	33	6.3%		
3 本人の子ども（息子）	13	16.5%	58	30.2%	71	26.2%		21	10.7%	169	61.7%	190	36.1%		
4 本人の子ども（娘）	30	38.0%	54	28.1%	84	31.0%	12	21.8%		44	16.1%	56	10.6%		
5 息子の配偶者（嫁）	17	21.5%	40	20.8%	57	21.0%	30	54.5%	17	8.6%		47	8.9%		
6 娘の配偶者（婿）	3	3.8%	4	2.1%	7	2.6%			42	21.3%	1	0.4%	43	8.2%	
7 父・母			2	1.0%	2	0.7%					1	0.4%	1	0.2%	
8 兄弟姉妹	3	3.8%	3	1.6%	6	2.2%	4	7.3%	21	10.7%	7	2.6%	32	6.1%	
9 上記以外の親せき			2	1.0%	2	0.7%	1	1.8%	21	10.7%	24	8.8%	46	8.7%	
10 近所の人	2	2.5%	4	2.1%	6	2.2%	2	3.6%	1	0.5%	5	1.8%	8	1.5%	
11 近所ではない友人知人	1	1.3%			1	0.4%			1	0.5%	1	0.4%	2	0.4%	
12 家政婦	1	1.3%	1	0.5%	2	0.7%			2	1.0%		2	0.4%	4	0.5%
13 ホームヘルパー	25	31.6%	44	22.9%	69	25.5%	16	29.1%	58	29.4%	43	15.7%	117	22.2%	
14 その他									1	0.5%	2	0.7%	3	0.6%	
15 孫			4	2.1%	4	1.5%	1	1.8%	17	8.6%	31	11.3%	49	9.3%	
16 訪問看護	2	2.5%	4	2.1%	6	2.2%					5	1.8%	5	1.0%	
17 他サービス事業者スタッフ	3	3.8%	6	3.1%	9	3.3%	2	3.6%	6	3.0%	13	4.7%	21	4.0%	
回答者以外の介護者（項目合成後）															
1 直系親族	42	53.2%	103	53.6%	145	53.5%	42	76.4%	99	50.3%	223	81.4%	364	69.2%	
2 業者	27	34.2%	52	27.1%	79	29.2%	17	30.9%	62	31.5%	56	20.4%	135	25.7%	
3 その他	6	7.6%	8	4.2%	14	5.2%	7	12.7%	43	21.8%	37	13.5%	87	16.5%	
介護体制															
1 単独	25	31.6%	66	34.4%	91	33.6%	5	9.1%	43	21.8%	36	13.1%	84	16.0%	
2 親族のみ	24	30.4%	72	37.5%	96	35.4%	29	52.7%	63	32.0%	151	55.1%	243	46.2%	
3 親族外のみ	11	13.9%	23	12.0%	34	12.5%	8	14.5%	48	24.4%	12	4.4%	68	12.9%	
4 親族および親族外	19	24.1%	31	16.1%	50	18.5%	13	23.6%	43	21.8%	75	27.4%	131	24.9%	
合計	79	100.0%	192	100.0%	271	100.0%	55	100.0%	197	100.0%	274	100.0%	526	100.0%	

の配偶者（婿）」（21.3%）、「嫁」が主たる介護者の場合は「本人の子ども（息子）」（61.7%）であった。すなわち、主たる介護者が実子の場合、彼らは自分の配偶者を最も多く選択している。なお、「ホームヘルパー」についても、全体で2割以上の選択があったので、有意差を確かめるために χ^2 検定を行った。その結果、有意な差異が見られ（ $\chi^2(2)=14.28$ $p<.001$ ）、残差分析を行った結果、主たる介護者が「娘」の場合の選択率（29.4%）は高く（ $d=3.1$ $p<.01$ ）、「嫁」の場合の選択率（15.7%）は低かった（ $d=-3.8$ $p<.01$ ）。

さらに、選択項目の内、「配偶者（夫）」「配偶者（妻）」「本人の子ども（息子）」「本人の

子ども(娘)」「息子の配偶者(嫁)」「娘の配偶者(婿)」「孫」は実子かその家族であるので、これらを「直系親族」とし、「家政婦」「ホームヘルパー」「訪問看護」「他サービス事業者スタッフ」は介護サービス等業者による介護者であるので、これらを「業者」とし、「父・母」「兄弟姉妹」「上記以外の親せき」「近所の人」「近所ではない友人知人」「その他」を「その他」とコード化して、それぞれについて、主たる介護者が「夫」か「妻」かで差異が存在するかどうかを χ^2 検定で確かめたが(Table 3-1-1:中段)、「直系親族」「業者」「その他」のいずれにおいても有意差は認められなかった。また、主たる介護者が「息子」「娘」「嫁」かで差異があるかどうかを同様に χ^2 検定で確かめた結果、「直系親族」($\chi^2(2)=53.59 p<.001$)、「業者」($\chi^2(2)=8.19 p<.05$)、「その他」($\chi^2(2)=6.39 p<.05$)のいずれにおいても有意差が見られ、残差分析を行った結果、「直系親族」の率が高いのは「嫁」(81.4%)の場合であり($d=6.3 p<.01$)、「業者」および「その他」の率が高いのは「娘」(31.5%、21.8%)の場合であった(それぞれ、 $d=2.4 p<.05$ 、 $d=2.5 p<.05$)。

さらに、「夫」や「妻」のように配偶者間で介護関係を形成している場合と「息子」「娘」「嫁」のように親子間で介護関係を形成している場合とで差異が存在するかどうかを確かめるために χ^2 検定を行った結果、「親子間」において「直系親族」($\chi^2(1)=18.41 p<.001$)や「その他」($\chi^2(1)=19.89 p<.001$)の参加率(69.2%、16.5%)が高かった。しかし、「業者」に関しては、有意な差異は見られなかった。

さて、第二分析である、介護体制についての検討においては、介護参加者の構成が「配偶者間」か「親子間」かという介護関係によってどのように異なるかを確かめるために、まず介護参加者を以下のようにコード化した。すなわち、いづれの項目も選択せず、回答者だけが介護している場合を「1 単独」と、「配偶者(夫)」「配偶者(妻)」「本人の子ども(息子)」「本人の子ども(娘)」「息子の配偶者(嫁)」「娘の配偶者(婿)」「孫」のいずれかが介護している場合を「2 直系親族のみ」と、それら以外のいずれかの参加者が介護している場合を「3 親族外のみ」と、上記の直系親族と親族外の両方が介護している場合を「4 親族および親族外」とコード化した。そして、これらの介護参加者の構成が、主たる介護者が「夫」か「妻」かで異なるかどうかを確かめるために、介護体制(4)と介護関係(2)の組み合わせで χ^2 検定を行った結果(Table 3-1-1:下段)、有意な差異は見られなかった。

また、親子間で介護している「息子」「娘」「嫁」の場合の間で差異が存在するかどうかを確かめるために、介護への参加の仕方(4)と続柄(3)の組み合わせで χ^2 検定を行った結果、有意な差異が見られ($\chi^2(6)=58.06 p<.001$)、残差分析を行ったところ、「娘」の場合に「単

独」(d=2.8 p<.01)、「親族および親族外」(d=6.1 p<.01) の率 (21.8%、24.4%) が高く、「嫁」の場合に「直系親族のみ」(d=4.3 p<.01) の率 (55.1%) が高くなっていた。

さらに、配偶者間の介護関係と親子間の介護関係の間に差異が存在するかどうかを検討するために χ^2 検定を行った結果、有意な差異が見られ($\chi^2(3)=33.44$ p<.001)、残差分析の結果、「配偶者間」の介護の場合は「単独」の率 (33.6%) が高く (d=5.7 p<.01)、「親子間」の介護の場合は「直系親族のみ」(d=2.9 p<.01) や「親族および親族外」(d=2.1 p<.05) の率 (46.2%、24.9%) が高かった。

次に、【居住形態】を全体で見ると、「介護以前から同居」が 81.2% と最も多く、これに「介護時から同居」(11.2%) を加えると、9割以上が同居していることが分かる (Table 3-2-1)。

配偶者間で介護関係を形成している「夫」「妻」の場合、ほとんど (95.9%) が介護以前から同居しているが、親子間で介護関係を形成している「娘」の場合、「息子」や「嫁」に比べて、「別居」もしくは「介護時からの同居」の率 (15.7%、22.8%) が高くなっている。こうした傾向が統計的に有意であるかどうかを確かめるために、まず【居住形態】を、「介護以前から同居」を「1 以前から同居」と、「介護時から同居」を「2 以後同居」と、「徒歩5分以内で別居」および「徒歩5分以上で別居」を「3 別居」とコード化した。なお、「無回答」を欠損値として分析対象から除外した。そして、親子間における介護関係 (3) と居住形態との関係について χ^2 検定を行った結果 (Table 3-2-2)、有意な差異が見られ ($\chi^2(4)=30.99$ p<.001)、残差分析の結果、「娘」の場合に「介護時から同居」(d=3.1 p<.01) や「別居」(d=3.9 p<.01) とする率 (15.7%、22.8%) が高く、「嫁」の場合に「以前から同居」(d=4.8 p<.01) とする率 (83.0%) が高いことが明らかになった。

このような居住形態は、介護体制に大きな影響を与えられとされる。親子間で介護している「息子」「娘」「嫁」の場合を対象に、居住形態別に介護体制を検討する。ここでは、

Table 3-2-1 介護体制 (2)【居住形態】

介護体制	配偶者間				配偶者合計	親子間						親子合計	全体合計			
	1夫	2妻	3息子	4娘		5嫁										
居住形態																
1 介護以前から同居	78	98.7%	182	94.8%	260	95.9%	42	76.4%	121	61.4%	224	81.8%	387	73.6%	647	81.2%
2 介護時から同居	1	1.3%	2	1.0%	3	1.1%	11	20.0%	45	22.8%	30	10.9%	86	16.3%	89	11.2%
3 徒歩5分以内で別居									14	7.1%	12	4.4%	26	4.9%	26	3.3%
4 徒歩5分以上で別居			1	0.5%	1	0.4%	2	3.6%	17	8.6%	4	1.5%	23	4.4%	24	3.0%
9 無回答			7	3.6%	7	2.6%					4	1.5%	4	0.8%	11	1.4%
合計	79	100.0%	192	100.0%	271	100.0%	55	100.0%	197	100.0%	274	100.0%	526	100.0%	797	100.0%

Table 3-2-2 親子間介護における居住形態

居住形態	親子間						親子合計	
	3 息子		4 娘		5 嫁			
1 以前から同居	42	76.4%	121	61.4%	224	83.0%	387	74.1%
2 介護時から同居	11	20.0%	45	22.8%	30	11.1%	86	16.5%
3 別居	2	3.6%	31	15.7%	16	5.9%	49	9.4%
合計	55	100.0%	197	100.0%	270	100.0%	522	100.0%

Table 3-3 親子間介護における居住形態別介護体制

居住形態		親子間介護				親子合計	
		1 娘		2 息子・嫁			
1 以前から同居	1 単独	23	19.0%	36	13.5%	59	15.2%
	2 親族のみ	41	33.9%	152	57.1%	193	49.9%
	3 親族外のみ	34	28.1%	16	6.0%	50	12.9%
	4 親族および親族外	23	19.0%	62	23.3%	85	22.0%
	合計	121	100.0%	266	100.0%	387	100.0%
2 介護時から同居・別居	1 単独	20	26.3%	5	8.5%	25	18.5%
	2 親族のみ	22	28.9%	26	44.1%	48	35.6%
	3 親族外のみ	14	18.4%	4	6.8%	18	13.3%
	4 親族および親族外	20	26.3%	24	40.7%	44	32.6%
	合計	76	100.0%	59	100.0%	135	100.0%

居住形態を「介護する以前から同居」と「介護時からの同居・別居」とに2分し、介護体制と介護関係を検討した。なお、介護関係では、先述の分析で、「介護以前からの同居」の率が低くなっている「娘」の場合の特徴を明らかにするために、「娘」とそれ以外の親子間介護（「息子」「嫁」）に2分して分析を行った。その結果（Table 3-3）、「介護以前から同居」している場合に有意な差異が見られ（ $\chi^2(3)=42.75$ $p<.001$ ）、残差分析を行ったところ、「娘」の場合は「直系親族外のみ」（ $d=6.0$ $p<.01$ ）の率（28.1%）が高く、「息子」「嫁」の場合は「直系親族のみ」（ $d=4.2$ $p<.01$ ）の率（57.1%）が高かった。また、「介護時からの同居・別居」でも有意な差異が見られ（ $\chi^2(3)=13.32$ $p<.001$ ）、残差分析を行ったところ、「娘」の場合は「単独」（ $d=2.6$ $p<.01$ ）と「直系親族外のみ」（ $d=2.0$ $p<.05$ ）の率（26.3%、18.4%）が高かった。他方、「息子・嫁」の場合は「直系親族のみ」「親族および親族外」（ともに $d=1.8$ $p<.10$ ）で高い（44.1%、40.7%）傾向が見られた。

【夕食状況】は、同居している世帯の中でも、特に家族がどのような生活をしているのかを知る手がかりとなるだろう。つまり、「夕食を誰ととるか」ということは、家族関係を知る上での一つの目安となるだろう。そこで、介護関係別に、要介護者の夕食状況を検討し

た。

配偶者間で介護関係を形成している「夫」と「妻」の場合の特徴を見ると（Table 3-4-1）、「夫」「妻」とともに、最も高かったのは「配偶者と二人」（64.6％、52.2％）であり、ついで「同居家族と」食事をする率（26.6％、25.0％）が高くなっている。こうした傾向に統計的な差が存在するかどうかを確かめるために、まず、【夕食状況】を、「同居家族と一緒に」を「1 同居家族」とし、「配偶者と2人」を「2 配偶者のみ」とし、「一人で食べる」と「介助を受けて一人で食べる」を「3 一人」とコード化して、「その他」と「無回答」を欠損値として分析対象から除外した。

配偶者間で介護関係を形成している「夫」と「妻」の場合に差異があるかどうかを確かめるために、夕食状況(3)と介護関係(2)の組み合わせで χ^2 検定を行った結果（Table 3-4-2）、有意な差異が見られ（ $\chi^2(2)=8.13 p<.05$ ）、残差分析を行ったところ、「夫」の場合は「配偶者のみ」（ $d=1.9 p<.10$ ）で高い（66.2％）傾向が見られ、「妻」の場合は「一人」（ $d=2.8 p<.01$ ）の率（20.7％）が高かった。すなわち、「夫」が「妻」を介護している場合には、夕食をともにしているケースが比較的多いものに対して、「妻」が「夫」を介護している場合は、「一人」で食事をしているケースが比較的多いことが明らかになった。

Table 3-4-1 介護体制 (3)【夕食状況】

介護体制	配偶者間				配偶者合計	親子間					親子合計	全体合計				
	1 夫		2 妻			3 息子	4 娘		5 嫁							
夕食状況【居住形態】で1、2、に○をした方のみ																
1 同居家族と一緒に	21	26.6%	46	25.0%	67	25.5%	19	35.8%	80	48.2%	126	49.6%	225	47.6%	292	39.7%
2 配偶者と2人	51	64.6%	96	52.2%	147	55.9%	2	3.8%	9	5.4%	20	7.9%	31	6.6%	178	24.2%
3 一人で食べる			14	7.6%	14	5.3%	19	35.8%	37	22.3%	50	19.7%	106	22.4%	120	16.3%
4 介助を受けて一人で食べる	5	6.3%	23	12.5%	28	10.6%	11	20.8%	34	20.5%	53	20.9%	98	20.7%	126	17.1%
5 その他	1	1.3%	2	1.1%	3	1.1%	2	3.8%	6	3.6%	5	2.0%	13	2.7%	16	2.2%
9 無回答	1	1.3%	3	1.6%	4	1.5%									4	0.5%
合計	79	100.0%	184	100.0%	263	100.0%	53	100.0%	166	100.0%	254	100.0%	473	100.0%	736	100.0%

Table 3-4-2 配偶者間介護における夕食状況

介護体制	配偶者間介護				配偶者合計	
	1 夫		2 妻			
夕食状況						
1 同居家族と	21	27.3%	46	25.7%	67	26.2%
2 配偶者とのみ	51	66.2%	96	53.6%	147	57.4%
3 ひとりで	5	6.5%	37	20.7%	42	16.4%
合計	77	100.0%	179	100.0%	256	100.0%

Table 3-4-3 親子間介護における夕食状況

	3息子		4娘		5嫁		親子合計	
夕食状況								
1 家族と	21	41.2%	89	55.6%	146	58.6%	256	55.7%
2 一人で	30	58.8%	71	44.4%	103	41.4%	204	44.3%
合計	51	100.0%	160	100.0%	249	100.0%	460	100.0%

Table 3-4-4 夕食状況

	1 配偶者間		2 親子間		合計	
夕食状況						
1 同居家族と一緒に	67	26.2%	225	48.9%	292	40.8%
2 配偶者と2人	147	57.4%	31	6.7%	178	24.9%
3 一人で食べる	14	5.5%	106	23.0%	120	16.8%
4 介助を受けて一人で食べる	28	10.9%	98	21.3%	126	17.6%
合計	256	100.0%	460	100.0%	716	100.0%

つぎに、親子間で介護関係を形成している「息子」「娘」「嫁」の場合の特徴を見ると(Table 3-4-3)、「娘」「嫁」では「同居家族と一緒に」に夕食をとる率(55.6%、58.6%)が多いが、「息子」の場合は「一人で食べる」の率(58.8%)の方が高い。三者間に差が存在するかどうかを確かめるために、【夕食状況】について、「1 同居家族と一緒に」と「2 配偶者と2人」を「家族と」とし、「一人で食べる」と「介助を受けて一人で食べる」を「一人で」とコード化して、夕食状況(2)と介護関係(3)の組み合わせで χ^2 検定を行った結果、有意な傾向が見られ($\chi^2(2)=5.22 p<.10$)、残差分析を行ったところ、主たる介護者が「息子」の場合、被介護者が介助されている場合も含めて「一人で」($d=2.2 p<.05$)食事をしている率(58.8%)が高いことが明らかになった。

さらに、「夫」や「妻」のように配偶者間で介護関係を形成している場合と、「息子」「娘」「嫁」のように親子間で介護関係を形成している場合の間に有意な差異が存在するかどうかを明らかにするために、夕食状況(4)と介護関係(2)の組み合わせで χ^2 検定を行った結果(Table 3-4-4)、有意な差異が見られ($\chi^2(3)=231.15 p<.001$)、残差分析を行ったところ、「配偶者間介護」の場合は「配偶者と二人」($d=15 p<.01$)の率(57.4%)が高く、「親子間介護」の場合は「同居家族と」($d=5.9 p<.01$)や「一人で」($d=6.0 p<.01$)や「介助を受けて」($d=3.5 p<.01$)の率(48.9%、23.0%、21.3%)が高かった。すなわち、配偶者間で介護関係を形成している場合、「配偶者と二人」で夕食をとっているケースが多いのに対して、親子間で介護関係を形成している場合は、被介護者は「同居家族と」、もし

くは、介助をうける場合も含め「一人で」食事をとるケースが比較的多いことが明らかになった。

(4) 要介護者の状況

【介護期間】【要介護度】【痴呆の程度】から、要介護者の状況を概観する。

【介護期間】に関しては、「夫」（32.9％）や「妻」（30.7％）、「娘」（32.0％）や「嫁」（30.3％）の場合、3割以上が「5年以上」であるのに対して、「息子」の場合は12.7％であり、「2年以上3年未満」（23.6％）の方が多かった（Table 4-1-1）。

配偶者間で介護関係を形成している場合の「夫」と「妻」とで差があるかどうかを確かめるために、【介護期間】を「3年未満」と「3年以上」にカテゴリー分けして χ^2 検定を行った結果、有意な差異は見られなかった（Table 4-1-2）。すなわち、主たる介護者が「夫」であるか「妻」であるかで、介護期間に違いのないことが明らかになった。

他方、親子間で介護関係を形成している場合の「息子」「娘」「嫁」とで差異が存在するかどうかを確かめるために、介護期間を先のように2分して χ^2 検定を行った結果、有意な

Table 4-1-1 要介護者の状況(1.1)【介護期間】

要介護者の状況	配偶者間			配偶者合計	親子間			親子合計	全体合計							
	1夫	2妻			3息子	4娘	5嫁									
介護期間																
1 6ヶ月未満	6	7.6%	12	6.3%	18	6.6%	9	16.4%	10	5.1%	18	6.6%	37	7.0%	55	6.9%
2 6ヶ月以上1年未満	7	8.9%	19	9.9%	26	9.6%	5	9.1%	21	10.7%	22	8.0%	48	9.1%	74	9.3%
3 1年以上2年未満	16	20.3%	33	17.2%	49	18.1%	11	20.0%	27	13.7%	43	15.7%	81	15.4%	130	16.3%
4 2年以上3年未満	10	12.7%	30	15.6%	40	14.8%	13	23.6%	31	15.7%	48	17.5%	92	17.5%	132	16.6%
5 3年以上4年未満	6	7.6%	22	11.5%	28	10.3%	4	7.3%	24	12.2%	35	12.8%	63	12.0%	91	11.4%
6 4年以上5年未満	7	8.9%	17	8.9%	24	8.9%	5	9.1%	19	9.6%	22	8.0%	46	8.7%	70	8.8%
7 5年以上	26	32.9%	59	30.7%	85	31.4%	7	12.7%	63	32.0%	83	30.3%	153	29.1%	238	29.9%
9 無回答	1	1.3%			1	0.4%	1	1.8%	2	1.0%	3	1.1%	6	1.1%	7	0.9%
合計	79	100.0%	192	100.0%	271	100.0%	55	100.0%	197	100.0%	274	100.0%	526	100.0%	797	100.0%

Table 4-1-2 要介護者の状況(1.2)【介護期間(項目合成後)】

要介護者の状況	配偶者間			配偶者合計	親子間			親子合計	全体合計							
	1夫	2妻			3息子	4娘	5嫁									
介護期間(項目合成後)																
1 3年未満	39	50.0%	94	49.0%	133	49.3%	38	70.4%	89	45.6%	131	48.3%	258	49.6%	391	49.5%
2 3年以上	39	50.0%	98	51.0%	137	50.7%	16	29.6%	106	54.4%	140	51.7%	262	50.4%	399	50.5%
合計	78	100.0%	192	100.0%	270	100.0%	54	100.0%	195	100.0%	271	100.0%	520	100.0%	790	100.0%

差異が見られ ($\chi^2(2)=10.71 P<.01$)、残差分析を行ったところ、「息子」の場合は「3年未満」(70.4%)が有意に高かった ($d=3.2 P<.01$)。すなわち、主たる介護者が「息子」の場合、介護期間は「3年未満」と短いケースが比較的多いということが明らかになった。

さらに、「夫」や「妻」のように配偶者間で介護関係を形成している場合と、「息子」「娘」「嫁」のように親子間で介護関係を形成している場合で差異が存在するかどうかを確かめるために、【介護期間】を同様に2分して χ^2 検定を行った結果、有意な差異は見られなかった。すなわち、「配偶者間」で介護している場合と「親子間」で介護している場合とで、介護期間の長さには有意な違いは見られないことが明らかになった。

つぎに、要介護者の状態を把握するために、介護保険制度を利用する上で認定をうけた【要介護度】について見た (Table 4-2-1)。なお、要介護度の認定は、本来、介護を要する時間の長さによって、「自立」から「要介護度5」までの7段階に分かれている。認定は、訪問調査員による調査の結果を判定ソフトに入力して行う一次判定と、その結果をもとに、調査員や主治医の意見書を参考にしながら、最終的に介護認定審査会で決定される。こうした判定作業は複数の専門家によって行われ、身体の状態や理解力、コミュニケーション能力等から判断される。高齢者の状態を把握するための指標には様々なものがあるが、要介護度は、介護者-被介護者関係に影響を与える要介護者の状態の有用な指標であろう。

本研究が取り扱う要介護者の介護度の分布傾向を、全国データと比較したものが Figure 1 である。「要支援」「要介護1」といった軽度の要介護者数は、全国データの方が上回っているのに対して、「要介護2」「要介護3」といった中度の要介護者数は本調査の方が上回っている。「要介護4」「要介護5」といった重度の要介護者数は全国データと本調査デー

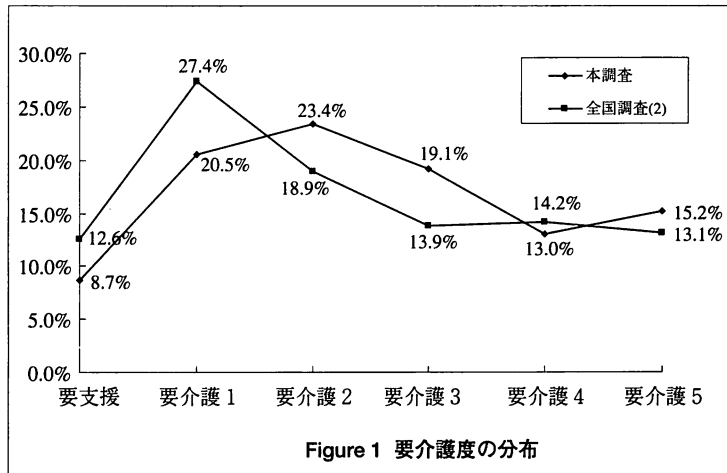
Table 4-2-1 要介護者の状況(2.1)【要介護度】

要介護者の状況	配偶者間			配偶者合計	親子間			親子合計	全体合計
	1夫	2妻			3息子	4娘	5嫁		
要介護度									
1 自立	2 2.5%	6 3.1%	8 3.0%	3 5.5%	1 0.5%	1 0.4%	5 1.0%	13 1.6%	
2 要支援	4 5.1%	15 7.8%	19 7.0%	7 12.7%	15 7.6%	26 9.5%	48 9.1%	67 8.4%	
3 要介護度1	22 27.8%	23 12.0%	45 16.6%	15 27.3%	37 18.8%	61 22.3%	113 21.5%	158 19.8%	
4 要介護度2	16 20.3%	50 26.0%	66 24.4%	7 12.7%	48 24.4%	59 21.5%	114 21.7%	180 22.6%	
5 要介護度3	10 12.7%	36 18.8%	46 17.0%	7 12.7%	41 20.8%	53 19.3%	101 19.2%	147 18.4%	
6 要介護度4	11 13.9%	27 14.1%	38 14.0%	9 16.4%	23 11.7%	30 10.9%	62 11.8%	100 12.5%	
7 要介護度5	11 13.9%	32 16.7%	43 15.9%	5 9.1%	29 14.7%	40 14.6%	74 14.1%	117 14.7%	
8 認定は受けているが不明	2 2.5%		2 0.7%	1 1.8%		1 0.4%	2 0.4%	4 0.5%	
9 無回答	1 1.3%	3 1.6%	4 1.5%	1 1.8%	3 1.5%	3 1.1%	7 1.3%	11 1.4%	
合計	79 100.0%	192 100.0%	271 100.0%	55 100.0%	197 100.0%	274 100.0%	526 100.0%	797 100.0%	

タの間に大きな開きはみられないようである。

配偶者間で介護関係を形成している場合の「夫」と「妻」とで有意な差異が存在するかどうかを明らかにするために、まず、【要介護度】を、「自立」から「要介護度2」までを「軽度」と、「要介護度3」から「要介護度5」までを「重度」とコード化し、「認定は受けているが不明」「無回答」を欠損値として分析対象から除外して、要介護度(2)と主たる介護者(2)の組み合わせで χ^2 検定を行った。その結果(Table 4-2-2)、有意な差異は見られなかった。すなわち、主たる介護者が「夫」であるか「妻」であるかで要介護者の介護度に差異は見られないことが明らかになった。

また、親子間で介護関係を形成している場合の「息子」「娘」「嫁」とで差異が存在するかどうかを確かめるために、要介護度(2)と主たる介護者(3)の組み合わせで χ^2 検定を行った結果 (Table 4-2-2)、有意な差異は見られなかった。すなわち、親子間の介護においても、主たる介護者によって要介護者の介護度に有意な差異は見られないことが明らかになった。



注：(1) 「自立」「わからない」「無回答」を削除
注：(2) 厚生労働省発表（平成13年度末現在）

Table 4-2-2 要介護者の状況(2.2)【要介護度(項目合成後)】

要介護者の状況	配偶者間			配偶者合計	親子間			親子合計	全体合計							
	1夫	2妻	3息子		4娘	5嫁										
要介護度(項目合成後)																
1 軽度	44	57.9%	94	49.7%	138	52.1%	32	60.4%	101	52.1%	147	54.4%	280	54.2%	418	53.5%
2 重度	32	42.1%	95	50.3%	127	47.9%	21	39.6%	93	47.9%	123	45.6%	237	45.8%	364	46.5%
合計	76	100.0%	189	100.0%	265	100.0%	53	100.0%	194	100.0%	270	100.0%	517	100.0%	782	100.0%

さらに、「配偶者間」で介護している場合と「親子間」で介護している場合で差異が存在しているかどうかを確かめるために、要介護度(2)と介護関係(2)の組み合わせで χ^2 検定を行った結果 (Table 4-2-2)、有意な差異は見られなかった。すなわち、配偶者間で介護を行う場合と親子間で介護を行う場合とで、要介護者の介護度に差異は見られないことが明らかになった。

つぎに、要介護者の状態を把握するためのもうひとつの指標として、【痴呆の程度】について見てみる。介護を要する状態になるのは、身体的な原因で生じる日常生活動作能力 (ADL) の低下ばかりではなく、痴呆症状が原因で生じる場合もある。しかし、脳梗塞などの発作によって身体的な能力が低下するなどして、要介護状態になる時と比べ、痴呆が原因で介護が必要になる場合、家族にとって、いつごろから状態が悪くなってきたのかははっきりしないし、要介護者の痴呆状態に対する認識も、周囲の者によってまちまちであったりする。そのことが、家族の介護に対する負担をさらに大きくする要因となる場合が多い。こうしたことから、ここでは、要介護者の痴呆状態の認識を把握するために、回答者が主観的に考えている【痴呆の程度】を問題とした (Table 4-3-1)。

全体的に、「痴呆はない」との回答が最も多い。また、「痴呆があり介護が困難」と回答しているのは全体の25%であるが、この比率は配偶者間での介護よりも親子間での介護の場合の方が高い。

配偶者間で介護関係を形成している場合の「夫」と「妻」とで要介護者の痴呆状態に差異があるかどうかを確かめるために、まず、【痴呆の程度】を、「1 痴呆症状あり介護困難」「2 痴呆症状あり介護困難でない」「3 痴呆症状無し」にコード化し、他の項目を欠損値として分析対象から除外し、痴呆の程度(3)と主たる介護者(2)の組み合わせで χ^2 検定を行った結果、有意な差異は見られなかった (Table 4-3-2)。すなわち、主たる介護者が「夫」である場合と「妻」である場合とで、彼らが認知する要介護者の痴呆の程度に差異は見られないことが明らかになった。

また、親子間で介護関係を形成している場合の「息子」「娘」「嫁」とで差異が存在するかどうかを確かめるために、痴呆の程度(3)と主たる介護者(3)の組み合わせで χ^2 検定を行った結果、有意な差異は見られなかった。すなわち、親子間の介護において主たる介護者が誰かによって、彼らが認知する要介護者の痴呆の程度に有意な差異は見られないことが明らかになった。

さらに、「配偶者間」で介護している場合と「親子間」で介護している場合で差異が存在するかどうかを確かめるために、痴呆の程度(3)と介護関係(2)の組み合わせで χ^2 検定を行

高齢者の在宅介護における援助授受の実態解明（高木・田中）

Table 4-3-1 要介護者の状況(3.1)【痴呆の程度】

要介護者の状況	配偶者間		配偶者合計	親子間			親子合計	全体合計								
	1夫	2妻		3息子	4娘	5嫁										
痴呆の程度																
1 痴呆あり介護が困難	19	24.1%	30	15.6%	49	18.1%	12	21.8%	45	22.8%	82	29.9%	139	26.4%	188	23.6%
2 痴呆あるが困難ではない	14	17.7%	45	23.4%	59	21.8%	19	34.5%	67	34.0%	99	36.1%	185	35.2%	244	30.6%
3 痴呆はない	37	46.8%	92	47.9%	129	47.6%	23	41.8%	76	38.6%	86	31.4%	185	35.2%	314	39.4%
4 わからない	3	3.8%	11	5.7%	14	5.2%	1	1.8%	5	2.5%	5	1.8%	11	2.1%	25	3.1%
5 答えたくない			2	1.0%	2	0.7%			1	0.5%			1	0.2%	3	0.4%
9 無回答	6	7.6%	12	6.3%	18	6.6%			3	1.5%	2	0.7%	5	1.0%	23	2.9%
合計	79	100.0%	192	100.0%	271	100.0%	55	100.0%	197	100.0%	274	100.0%	526	100.0%	797	100.0%

Table 4-3-2 要介護者の状況(3.2)【痴呆の程度（項目合成後）】

要介護者の状況	配偶者間		配偶者合計	親子間			親子合計	全体合計								
	1夫	2妻		3息子	4娘	5嫁										
痴呆の状態（項目合成後）																
1 痴呆あり問題あり	19	27.1%	30	18.0%	49	20.7%	12	22.2%	45	23.9%	82	30.7%	139	27.3%	188	25.2%
2 痴呆あり問題なし	14	20.0%	45	26.9%	59	24.9%	19	35.2%	67	35.6%	99	37.1%	185	36.3%	244	32.7%
3 痴呆なし	37	52.9%	92	55.1%	129	54.4%	23	42.6%	76	40.4%	86	32.2%	185	36.3%	314	42.1%
合計	70	100.0%	167	100.0%	237	100.0%	54	100.0%	188	100.0%	267	100.0%	509	100.0%	746	100.0%

った結果、有意な差異は見られなかった。すなわち、配偶者間で介護を行う場合と親子間で介護を行う場合で、認知された要介護者の痴呆程度に差異が見られないことが明らかになった。

【考 察】

(1) 基本的属性から見られる介護者のライフ・ステージについて

以上の分析から、主たる介護者として「夫」や「妻」は、彼らが子どもの扶養や就労といった社会的な役割からリタイアするライフ・ステージで介護を行っているという実態が明らかになった。また、親を介護している「息子」や「娘」についても、子育てや就労を終えた段階で介護に従事している者が多いことが明らかとなった。しかし、「嫁」の場合、他の介護者に比べて、末子を扶養している比率が高く、子育てをしながら介護に従事している者が多かった。そして、こうした子育てと介護を並行して行っている若年齢層の「嫁」は、健康状態に何らかの問題を感じている場合が多い。この若年齢層の女性には更年期障害を患う人も多く、介護に関わらず、肉体的につらい思いをすることの多い年齢層である。

それに加え、家事労働の中でも介護は特に大きな労力が必要とされ、他の家事との両立が容易ではないことがうかがえた。介護者の健康に関しては、老人が老人を介護するいわゆる「老老介護」の問題が取り上げられることが多い。その一方で、「若い介護者」としても健康上で問題を抱えるケースが多いことが示唆された。

(2) 地域とのつながりについて

居住年数に関しては、配偶者間介護の「夫」と「妻」で有意な差異が見られなかったが、親子間介護においては差が認められ、「息子」は居住年数が「30年以上」と比較的長いケースが多く、「嫁」は「30年未満」と比較的短いケースが多かった。これは、「息子」の家に「嫁」が嫁いで介護しているケースが多いことを示唆するものと考えられる。また、近所づきあいの程度においては、「夫」よりも「妻」が、「息子」よりも「嫁」が、より親密な近所付き合いをしていることが分かった。また、居住年数が長いと、「夫」や「息子」でも、親密な付き合いをする率が高くなっていった。しかしながら、「娘」が主たる介護者の場合、居住年数に関係なく、近所づきあいが親密でないケースが多かった。

居住年数が短いと、「近所づきあい」は、主婦である「妻」や「嫁」によって行われる場合が多いが、居住年数が長いと、そうした続柄による差は無くなり、付き合いの程度も深まっている。しかし、娘が介護する場合は、他の続柄ほど、付き合いが深まっている比率は高くなかった。居住形態についても、娘は他の子ども、すなわち「息子」や「嫁」にくらべて、別居もしくは介護が必要になって同居している率が高い。「娘」は、地域的なつながりの程度や居住年数に関わらず、付き合いの程度が深くないところで介護している率が高かった。こうした「娘」の介護状況については後に記述する。

(3) 介護体制について

「夫」が介護する場合と「妻」が介護する場合とで、介護体制に差異が見られなかったものの、子どもが介護する場合と比較すると、単独で介護を行っている率が高かった。自分の配偶者を介護することは、一般的に考えると、介護者も高齢になっている場合が多いので、介護の負担も大きいと考えられる。にもかかわらず、単独で介護を行うことが多いという実態は一体、何を示しているのであろうか。一つに、非常に負担が大きい介護であっても、それが配偶者への介護であれば、人の手を借りずもと、積極的に取り組むという動機の強さが考えられる。また、介護責任がはっきりしているために、介護に他者の手を借りることを差し控えさせるような規範意識が存在することも考えられる。このような要因

については、介護サービスへの態度を検討する上でも、今後の研究で明らかにしていきたい。

また、子どもが介護者の場合、「嫁」が親族のみで介護する率が高いのに対して、「娘」は、居住形態を問わず、業者の利用を含む「直系親族外のみ」で介護する率が高かった。しかし、介護時から同居したり、別居して介護している場合は、単独で介護する率が高かった。「娘」は、地域的なつながりの程度や居住年数に関わらず、付き合いの程度が深くないところで介護している率が高かった。家族や地域からのサポートが得られず、業者等のサービスを利用しながら介護を行っている場合の多いことが推察された。

春日（2001）は、1968年「居宅寝たきり老人実態調査」（全国社会福祉協議会）と1995年「高齢者の生活実態調査」（東京都民生局）との比較の中で、息子の妻の立場で介護を担う女性が減少する一方で、娘の立場で介護を担う人が増加していることを指摘している。さらに、将来の看取り期待においても「息子の妻」より「娘」を希望する人が多くなっているという。従来の家制度の中では、他家に嫁に出した娘が肉親の介護を担うケースはまれであったであろうが、今後こうした「娘」による介護はさらに増えるであろう。伝統的な三世同居の中での介護とは異なり、このような介護は、介護者自身の、子どもとしての愛情に基づく個人的な責任感で行われていることが考えられる。そうした個人の意識に基づく介護が、結果的に業者の利用を促進していく要因として考えられよう。

(4) 要介護者の状況について

【介護期間】に関しては、「息子」において短期の比率が高いこと以外に、有意な差異が見られなかった。特に、直接的に介護負担に影響を及ぼすと思われる【要介護度】については、続柄による違いは見られなかった。特に、配偶者間介護と親子間介護においても、要介護者の状態による介護の負担というものに差はなかった。

第2部 現在および将来の介護に対する態度

【目的】

ここでは、家族による介護の在り方を規定すると考えられる、主たる介護者の心理的要因として、(5)現在の介護に対する態度と(6)将来の介護に対する態度とを取り上げ、その様態を明らかにする。

【結果】

(5) 現在の介護に対する態度

(a) 介護している理由（意味づけ）

これは、主たる介護者となって介護を行っている状況を、個人がどのように意味づけているかということであり、介護意欲を直接的に規定する重要な要因である。そこで、どういう理由で介護しているかを複数回答で尋ねた（Table 5-1：上段）。

全体で最も多く選択されていた理由は「1 続柄として当然」（85.7％）であり、以下、「2 他に適当な人がいない」（18.9％）、「5 結局自分がすることになった」（14.8％）と続いている。

この介護の理由（意味づけ）が主たる介護者が「夫」か「妻」かで異なるかどうかを確かめるために、まず、「2 他に適当な人がいない」と「3 専業主婦（無職）は自分だけ」を「他に適当な人がいない」にまとめ、「6 その他」を分析対象から除外して、4項目に整理し、その上で、介護理由が、「夫」と「妻」で異なるかどうかを、 χ^2 検定で確かめた（Table 5-1：下段）。その結果、どの理由についても有意な差異は見られなかった。すなわち、配偶者間で介護をしている場合、主たる介護者が「夫」であっても「妻」であっても、介護理由に差異が見られないことが明らかになった。

Table 5-1 現在の介護に対する態度(1)【a. 介護理由】

現在の介護に対する態度	配偶者間			配偶者合計	親子間			親子合計	全体合計							
	1夫	2妻			3息子	4娘	5嫁									
(a) 介護理由																
1 続柄として当然	74	93.7%	180	93.8%	254	93.7%	51	92.7%	169	85.8%	209	76.3%	429	81.6%	683	85.7%
2 他に適当な人がいない	12	15.2%	18	9.4%	30	11.1%	7	12.7%	30	15.2%	84	30.7%	121	23.0%	151	18.9%
3 専業主婦（無職）は自分だけ	1	1.3%	31	16.1%	32	11.8%			16	8.1%	38	13.9%	54	10.3%	86	10.8%
4 自分の方がよくできる	6	7.6%	12	6.3%	18	6.6%	7	12.7%	26	13.2%	25	9.1%	58	11.0%	76	9.5%
5 結局自分がすることになった	4	5.1%	10	5.2%	14	5.2%	6	10.9%	44	22.3%	54	19.7%	104	19.8%	118	14.8%
6 その他	4	5.1%	4	2.1%	8	3.0%	2	3.6%	15	7.6%	28	10.2%	45	8.6%	53	6.6%
(b) 介護理由（項目合成後）																
1 続柄として当然	74	93.7%	180	93.8%	254	93.7%	51	92.7%	169	85.8%	209	76.3%	429	81.6%	683	85.7%
2 他に適当な人がいない	13	16.5%	41	21.4%	54	19.9%	7	12.7%	46	23.4%	105	38.3%	158	30.0%	212	26.6%
3 自分の方がよくできるので	6	7.6%	12	6.3%	18	6.6%	7	12.7%	26	13.2%	25	9.1%	58	11.0%	76	9.5%
4 結局自分がすることになった	4	5.1%	10	5.2%	14	5.2%	6	10.9%	44	22.3%	54	19.7%	104	19.8%	118	14.8%
合計	79	100.0%	192	100.0%	271	100.0%	55	100.0%	197	100.0%	274	100.0%	526	100.0%	797	100.0%

次に、親子間で介護関係を形成している「息子」「娘」「嫁」で差異があるかどうかを確かめるために、以上のように4項目にまとめて χ^2 検定を行った。その結果、「1 続柄として当然」において有意な結果が得られ($\chi^2(2)=11.98 p<.01$)、残差分析を行ったところ、「息子」(92.7%) ($d=2.3 p<.05$) や「娘」(85.8%) ($d=1.9 p<.10$) における選択率が高く、「嫁」における選択率は有意に低かった(76.3%) ($d=-3.3 p<.01$)。また、「2 他に適当な人がいない」においても有意な結果が得られ($\chi^2(2)=20.98 p<.001$)、残差分析を行ったところ、「息子」(12.7%) ($d=-3.0 p<.01$) や「娘」(23.4%) ($d=-2.6 p<.01$) における選択率は有意に低く、「嫁」(38.3%) ($d=4.3 p<.01$) における選択率が有意に高かった。すなわち、続柄から当然といった、個人的規範からの指示を理由に介護しているのは「息子」や「娘」といった実子による親子間介護であり、他に介護できる適当な人がいないからといった、消極的な理由で介護しているのは嫁による親子間介護であることが分かった。

親子間介護の場合、その親子がどのような居住形態のもとで生活しているかが、介護理由に影響すると思われる。そこで、介護理由を居住形態別に検討することにした。そこで、同居形態に関して、介護が生じる以前から家族として同居していた「以前より同居」(A)群と「介護時より同居・別居」(B)群に分けて分析した。その結果、「息子」による介護の場合 (Table 5-1-1)、どの理由についても、両群間に有意差は見られなかった。すなわち、息子の場合、介護が必要になる以前から同居していた親を介護する場合でも、必要になってから同居、もしくは別居を続けて介護する場合でも、介護理由に差異がないことが明らかになった。つぎに、「娘」の場合 (Table 5-1-2)、「3 自分の方がよくできるので」($\chi^2(1)=10.43 p<.01$) と「4 結局自分がすることになった」($\chi^2(1)=13.68 p<.001$) の理由において有意差があり、「以前より同居」群 (6.6%、13.2%) よりも「介護時より同居・別居」群の選択率 (23.7%、36.8%) の方が有意に高いことが分かった。さらに、「嫁」の場合 (Table 5-1-3)、「1 続柄として当然」という理由においては、「以前より同居している」群の選択率 (78.6%) の方が高く ($\chi^2(1)=4.22 p<.05$)、「4 結局自分がすることになった」という理由においては、「介護時より同居・別居」群の選択率 (34.8%) の方が高い ($\chi^2(1)=6.5 p<.05$) ことが分かった。

さらに、配偶者間介護と親子間介護とで介護理由に差異が存在するかどうかを明らかにするために χ^2 検定を行った (Table 5-1: 下段)。その結果、全ての理由において有意差が認められた。「1 続柄として当然」という理由においては、配偶者間介護の選択率 (93.7%) の方が高かったが ($\chi^2(1)=20.62 p<.001$)、「2 他に適当な人がいない」(30.0%)

Table 5-1-1 息子の居住形態別 介護する理由

介護理由 (項目合成後)	A群		B群		息子合計	
1 続柄として当然	39	92.9%	12	92.3%	51	92.7%
2 他に適当な人がいない	5	11.9%	2	15.4%	7	12.7%
3 自分の方がよくできるので	4	9.5%	3	23.1%	7	12.7%
4 結局自分がすることになった	4	9.5%	2	15.4%	6	10.9%
合計	42	100.0%	13	100.0%	55	100.0%

A群 介護する以前から同居
B群 別居もしくは介護するようになってから同居

Table 5-1-2 娘の居住形態別 介護する理由

介護理由 (項目合成後)	A群		B群		娘合計	
1 続柄として当然	104	86.0%	65	85.5%	169	85.8%
2 他に適当な人がいない	30	24.8%	16	21.1%	46	23.4%
3 自分の方がよくできるので	8	6.6%	18	23.7%	26	13.2%
4 結局自分がすることになった	16	13.2%	28	36.8%	44	22.3%
合計	121	100.0%	76	100.0%	197	100.0%

A群 介護する以前から同居
B群 別居もしくは介護するようになってから同居

Table 5-1-3 嫁の居住形態別 介護する理由

介護理由 (項目合成後)	A群		B群		嫁合計	
1 続柄として当然	176	78.6%	29	63.0%	205	75.9%
2 他に適当な人がいない	85	37.9%	20	43.5%	105	38.9%
3 自分の方がよくできるので	21	9.4%	4	8.7%	25	9.3%
4 結局自分がすることになった	38	17.0%	16	34.8%	54	20.0%
合計	224	100.0%	46	100.0%	270	100.0%

A群 介護する以前から同居
B群 別居もしくは介護するようになってから同居

($\chi^2(1)=8.85$ $p<.01$) や「3 自分の方がよくできるので」(11.6%) ($\chi^2(1)=3.49$ $p<.10$) や「4 結局自分がすることになった」(19.8%) ($\chi^2(1)=29.10$ $p<.001$) という理由においては、親子間介護の選択率の方が高かった。すなわち、「1 続柄として当然」といった、家族としての絆意識に基づいて生じる個人的な規範意識から介護しているのは配偶者間介護において多く、その他の理由で介護しているのは親子間介護において多いことが分かった。

(b) 介護する上で気をつけていること

自分自身が、日常、介護する上で「気をつけていること」について、複数回答を求めた (Table 5-2-1)。

全体で最も多く選択された気をつけていることは、「1 自分で出来ることは自分で」(77.7%)であり、以下、「6 食べやすい食事」(55.1%)、「9 部屋を清潔にする」(55.1%)、「2 生活のリズムを崩さない」(55.0%)、と続き、半数以上の人が選択している。

Table 5-2-1 現在の介護に対する態度(2)【b. 介護上の注意】

現在の介護に対する態度	配偶者間		配偶者合計	親子間			親子合計	全体合計								
	1 夫	2 妻		3 息子	4 娘	5 嫁										
(b) 介護上の注意																
1 自分で出来ることは自分で	63	79.7%	140	72.9%	203	74.9%	41	74.5%	162	82.2%	213	77.7%	416	79.1%	619	77.7%
2 生活のリズムを崩さない	42	53.2%	100	52.1%	142	52.4%	25	45.5%	110	55.8%	161	58.8%	296	56.3%	438	55.0%
3 できるだけ一人にさせない	42	53.2%	95	49.5%	137	50.6%	15	27.3%	74	37.6%	78	28.5%	167	31.7%	304	38.1%
4 話を聞くようにしている	36	45.6%	92	47.9%	128	47.2%	24	43.6%	84	42.6%	84	30.7%	192	36.5%	320	40.2%
5 付近に危険な物を置かない	18	22.8%	73	38.0%	91	33.6%	24	43.6%	89	45.2%	125	45.6%	238	45.2%	329	41.3%
6 食べやすい食事	28	35.4%	95	49.5%	123	45.4%	26	47.3%	119	60.4%	171	62.4%	316	60.1%	439	55.1%
7 床ずれができないようにする	13	16.5%	59	30.7%	72	26.6%	14	25.5%	50	25.4%	68	24.8%	132	25.1%	204	25.6%
8 近所に知られないようにする	1	1.3%	2	1.0%	3	1.1%	2	3.6%	1	0.5%	1	0.4%	4	0.8%	7	0.9%
9 部屋を清潔にする	35	44.3%	106	55.2%	141	52.0%	24	43.6%	114	57.9%	160	58.4%	298	56.7%	439	55.1%
10 その他	4	5.1%	6	3.1%	10	3.7%	2	3.6%	14	7.1%	13	4.7%	29	5.5%	39	4.9%
合計	79	100.0%	192	100.0%	271	100.0%	55	100.0%	197	100.0%	274	100.0%	526	100.0%	797	100.0%

配偶者間介護関係を形成している「夫」と「妻」とで気をつけていることに違いがあるかどうかを確かめるために、 χ^2 検定を行ったところ、「5 付近に危険な物を置かない」(38.0%) ($\chi^2(1)=5.16$ $p<.05$)、「6 食べやすい食事」(49.5%) ($\chi^2(1)=3.9$ $p<.05$)、「7 床ずれができないようにする」(30.7%) ($\chi^2(1)=5.13$ $p<.05$)において有意差が見られ、いずれも「妻」の選択率の方が高かった。なお、「8 近所に知られないようにする」と「10 その他」については、被選択率が少なかったため、 χ^2 検定は行わなかった。

次に、親子間で介護関係を形成している「息子」「娘」「嫁」とで気をつけていることに違いがあるかどうかを確かめるために、 χ^2 検定を行った。その結果、「3 できるだけ一人にさせない」において有意な傾向($\chi^2(2)=4.94$ $p<.10$)が、「4 話を聞くようにしている」において有意差($\chi^2(2)=8.48$ $p<.05$)が見られた。そこで、「3 できるだけ一人にさせない」について残差分析を行ったところ、「娘」の選択率が高く(37.6%) ($d=2.2$ $p<.05$)、逆に、「嫁」の選択率が低い傾向(28.5%) ($d=-1.7$ $p<.10$)が見られた。また、「4 話を聞くようにしている」について残差分析を行ったところ、「娘」の選択率が高く(42.6%) ($d=2.5$ $p<.05$)、「嫁」の選択率が低かった(36.5%) ($d=-2.9$ $p<.01$)。

さらに、配偶者間介護と親子間介護とで気をつけていることに差が見られるかどうかを明らかにするために χ^2 検定を行った。その結果、「3 できるだけ一人にさせない」($\chi^2(i)=26.01$ $p<.001$)と「4 話を聞くようにしている」($\chi^2(1)=8.12$ $p<.01$)において、配偶者間介護の方が、親子間介護よりも選択率が高かった(50.6%、47.2%)。逆に、「5 付近に危険な物を置かない」($\chi^2(1)=9.56$ $p<.01$)や「6 食べやすい食事」($\chi^2(1)=15.00$)

p<.001) においては、親子間介護の方が選択率が高かった(45.2%、60.1%)。

(c) 介護上の問題

自分自身が、日常、介護する上で困難に感じている点について、複数回答を求めた(Table 5-2-2)。

全体で最も多く選択されていた問題点は、「3 外出が制限される」(72.6%)であり、以下、「4 ストレスがたまる」(60.0%)、「1 自由時間を持ってない」(50.7%)と続いている。

配偶者間で介護関係を形成している「夫」と「妻」とで、問題点に違いがあるかどうか

Table 5-2-2 現在の介護に対する態度(3)【C. 介護上の問題】

現在の介護に対する態度	配偶者間		配偶者合計	親子間			親子合計	全体合計								
	1 夫	2 妻		3 息子	4 娘	5 嫁										
(c) 介護上の問題																
1 自由時間を持ってない	37	46.8%	97	50.5%	134	49.4%	24	43.6%	113	57.4%	133	48.5%	270	51.3%	404	50.7%
2 安心して眠れない	20	25.3%	63	32.8%	83	30.6%	10	18.2%	40	20.3%	56	20.4%	106	20.2%	189	23.7%
3 外出が制限される	50	63.3%	131	68.2%	181	66.8%	34	61.8%	154	78.2%	210	76.6%	398	75.7%	579	72.6%
4 ストレスがたまる	40	50.6%	105	54.7%	145	53.5%	28	50.9%	125	63.5%	180	65.7%	333	63.3%	478	60.0%
5 肉体的負担が大きい	23	29.1%	74	38.5%	97	35.8%	9	16.4%	47	23.9%	69	25.2%	125	23.8%	222	27.9%
6 悩みを聞いてくれる相手がない	6	7.6%	13	6.8%	19	7.0%	5	9.1%	13	6.6%	22	8.0%	40	7.6%	59	7.4%
7 仕事との両立ができない	6	7.6%	5	2.6%	11	4.1%	14	25.5%	40	20.3%	36	13.1%	90	17.1%	101	12.7%
8 介護者自身の健康に不安	37	46.8%	90	46.9%	127	46.9%	15	27.3%	65	33.0%	72	26.3%	152	28.9%	279	35.0%
9 他の家族の世話ができない			7	3.6%	7	2.6%	2	3.6%	15	7.6%	34	12.4%	51	9.7%	58	7.3%
10 配偶者の理解がない	4	5.1%	14	7.3%	18	6.6%	1	1.8%	12	6.1%	29	10.6%	42	8.0%	60	7.5%
11 親せきとのトラブル	3	3.8%	6	3.1%	9	3.3%	1	1.8%	6	3.0%	20	7.3%	27	5.1%	36	4.5%
12 近所のうわさが気になる	2	2.5%	2	1.0%	4	1.5%	1	1.8%	6	3.0%	10	3.6%	17	3.2%	21	2.6%
13 近所との関係に気がつかう	3	3.8%	7	3.6%	10	3.7%	5	9.1%	10	5.1%	15	5.5%	30	5.7%	40	5.0%
14 来客が制限される	7	8.9%	19	9.9%	26	9.6%	8	14.5%	40	20.3%	54	19.7%	102	19.4%	128	16.1%
15 適切な介護方法わからない	7	8.9%	7	3.6%	14	5.2%	5	9.1%	8	4.1%	22	8.0%	35	6.7%	49	6.1%
16 経済的な負担が大きい	17	21.5%	30	15.6%	47	17.3%	10	18.2%	21	10.7%	32	11.7%	63	12.0%	110	13.8%
17 家の広さ等住宅が不便	22	27.8%	32	16.7%	54	19.9%	7	12.7%	54	27.4%	47	17.2%	108	20.5%	162	20.3%
18 介護サービスが利用できない	3	3.8%	9	4.7%	12	4.4%			9	4.6%	14	5.1%	23	4.4%	35	4.4%
19 かかりつけ医がいない	6	7.6%	6	3.1%	12	4.4%			8	4.1%	12	4.4%	20	3.8%	32	4.0%
20 トイレ風呂等介助負担大	16	20.3%	36	18.8%	52	19.2%	11	20.0%	35	17.8%	47	17.2%	93	17.7%	145	18.2%
21 サービス利用手続きわかりにくい	4	5.1%	7	3.6%	11	4.1%	1	1.8%	4	2.0%	3	1.1%	8	1.5%	19	2.4%
22 介護保険の事務処理が面倒	7	8.9%	10	5.2%	17	6.3%	2	3.6%	9	4.6%	15	5.5%	26	4.9%	43	5.4%
23 その他	5	6.3%	4	2.1%	9	3.3%	2	3.6%	6	3.0%	4	1.5%	12	2.3%	21	2.6%
24 特に困っていない	17	21.5%	29	15.1%	46	17.0%	7	12.7%	24	12.2%	20	7.3%	51	9.7%	97	12.2%
合計	79	100.0%	192	100.0%	271	100.0%	55	100.0%	197	100.0%	274	100.0%	526	100.0%	797	100.0%

を確かめるために、全体で1割以上が選択している項目について χ^2 検定を行った。その結果、「17 家の広さ等住宅が不便」において、「夫」の方が選択率が高い傾向（27.8%）（ $\chi^2(1)=3.7 p<.10$ ）が見られたが、それ以外の項目では、有意差は見られなかった。すなわち、日常、介護する上で困難に感じている点について、「夫」と「妻」との間に有意な違いはほとんど見られないことが明らかになった。

次に、親子間で介護関係を形成している「息子」「娘」「嫁」とで問題点に違いがあるかどうかを確かめるために、全体で1割以上が選択している項目について χ^2 検定を行った。その結果、「7 仕事との両立ができない」において有意差が見られ（ $\chi^2(2)=7.1 p<.05$ ）、残差分析を行ったところ、「息子」における選択率（25.5%）が高い傾向が見られ（ $d=1.7 p<.10$ ）、「嫁」における選択率が低かった（13.1%）（ $d=-2.5 p<.05$ ）。また「17 家の広さ等住宅が不便」においても有意差が見られ（ $\chi^2(2)=9.6 p<.01$ ）、残差分析を行ったところ、「娘」における選択率が高く（27.4%）（ $d=3.0 p<.01$ ）、「嫁」における選択率が低い（17.2%）（ $d=-2.0 p<.05$ ）ことが明らかになった。なお、「1 自由時間を持ってない」においては、有意水準には満たなかったものの（ $\chi^2(2)=5.0 p<.10$ ）、「娘」（ $d=2.1 p<.05$ ）における選択率が高い傾向（57.4%）が見られた。

さらに、配偶者間介護と親子間介護とで問題に差異が存在するかどうかを明らかにするために全体で1割以上が選択している項目について χ^2 検定を行った。その結果、「2 安心して眠れない」（30.6%）（ $\chi^2(1)=10.2 p<.01$ ）、「5 肉体的負担が大きい」（35.8%）（ $\chi^2(1)=12.2 p<.001$ ）、「8 介護者自身の健康に不安」（46.9%）（ $\chi^2(1)=24.5 p<.001$ ）、「16 経済的な負担が大きい」（17.3%）（ $\chi^2(1)=3.8 p<.05$ ）、「24 特に困っていない」（17.0%）（ $\chi^2(1)=8.1 p<.01$ ）においては、配偶者間介護の方が、親子間介護よりも選択率が高かった。逆に、「3 外出が制限される」（72.6%）（ $\chi^2(1)=6.6 p<.05$ ）、「4 ストレスがたまる」（60.0%）（ $\chi^2(1)=6.7 p<.01$ ）、「7 仕事との両立ができない」（12.7%）（ $\chi^2(1)=26.3 p<.001$ ）、「14 来客が制限される」（16.1%）（ $\chi^2(1)=12.0 p<.001$ ）においては、親子間介護の方が選択率が高かった。

(d) 介護のやりがい

介護中に最もやりがいを感じる点について回答を求めた（Table 5-3-1）。

全体で最も多く選択されていたやりがいは、「1 気持ちよさそうにしている」（30.1%）であり、以下、「3 要介護者から感謝される」（15.2%）、「2 家族が手伝ってくれる」（9.9%）と続くが、「6 やりがいはめったにない」（21.5%）とする回答もかなりあつ

Table 5-3-1 現在の介護に対する態度(3)【d. 介護のやりがい】

現在の介護に対する態度	配偶者間		配偶者合計	親子間			親子合計	全体合計								
	1夫	2妻		3息子	4娘	5嫁										
(d) 介護のやりがい																
1 気持ちよさそうにしている	26	40.6%	65	38.2%	91	38.9%	19	39.6%	74	45.4%	56	24.0%	149	33.6%	240	35.4%
2 家族が手伝ってくれる	4	6.3%	20	11.8%	24	10.3%	4	8.3%	21	12.9%	30	12.9%	55	12.4%	79	11.7%
3 要介護者から感謝される	9	14.1%	22	12.9%	31	13.2%	5	10.4%	23	14.1%	62	26.6%	90	20.3%	121	17.8%
4 お礼や財産	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
5 その他	3	4.7%	1	0.6%	4	1.7%	2	4.2%	8	4.9%	10	4.3%	20	4.5%	24	3.5%
6 やりがいはめったにない	13	20.3%	43	25.3%	56	23.9%	17	35.4%	32	19.6%	66	28.3%	115	25.9%	171	25.2%
8 無回答	9	14.1%	19	11.2%	28	12.0%	1	2.1%	5	3.1%	9	3.9%	15	3.4%	43	6.3%
合計	64	100.0%	170	100.0%	234	100.0%	48	100.0%	163	100.0%	233	100.0%	444	100.0%	678	100.0%

Table 5-3-2 現在の介護に対する態度(3)【d. 介護のやりがい(項目合成後)】

現在の介護に対する態度	配偶者間		配偶者合計	親子間			親子合計	全体合計								
	1夫	2妻		3息子	4娘	5嫁										
(d) 介護のやりがい(項目合成後)																
1 気持ちよさそう	26	50.0%	65	43.3%	91	45.0%	19	42.2%	74	49.3%	56	26.2%	149	36.4%	240	39.3%
2 家族が手伝ってくれる	4	7.7%	20	13.3%	24	11.9%	4	8.9%	21	14.0%	30	14.0%	55	13.4%	79	12.9%
3 要介護者・周囲から感謝	9	17.3%	22	14.7%	31	15.3%	5	11.1%	23	15.3%	62	29.0%	90	22.0%	121	19.8%
4 やりがいがない	13	25.0%	43	28.7%	56	27.7%	17	37.8%	32	21.3%	66	30.8%	115	28.1%	171	28.0%
合計	52	100.0%	150	100.0%	202	100.0%	45	100.0%	150	100.0%	214	100.0%	409	100.0%	611	100.0%

た。なお、「4 お礼や財産」を選択したものはいなかった。そこで「4 お礼や財産」「5 その他」「8 無回答」を分析対象から除外して4項目で分析を行った (Table 5-3-2)。

配偶者間で介護関係を形成している「夫」と「妻」とでやりがいに差異が存在するかどうかを確かめるために χ^2 検定を行ったところ、「夫」と「妻」とで有意差は見られなかった。すなわち、介護中に最もやりがいを感じる点について、「夫」と「妻」とで違いがないことが明らかになった。

次に、親子間で介護関係を形成している「息子」「娘」「嫁」とでやりがいに差異があるかどうかを確かめるために χ^2 検定を行った。その結果、有意な差異が見られ($\chi^2(6)=28.9$ $p<.001$)、残差分析を行ったところ、「1 気持ちよさそうにしている」においては、「娘」(49.3%) ($d=4.1$ $p<.01$)の選択率が高く、「嫁」(26.2%) ($d=-4.5$ $p<.01$)の選択率が低かった。また、「3 要介護者から感謝される」においては、「嫁」(29.0%) ($d=3.6$ $p<.01$)の選択率が高く、「息子」(11.1%) ($d=-1.9$ $p<.10$)、「娘」(15.3%) ($d=-2.5$ $p<.05$)の選択率が低かった。さらに、「6 やりがいはめったにない」においては、「娘」(21.3%) ($d=-2.3$ $p<.05$)の選択率が低かった。すなわち、「娘」の場合、「1 気持ち

ちよさそうにしている」といった要介護者の反応に満足し、やりがいを感じて介護をするケースが多く、「嫁」の場合は、「3 要介護者から感謝される」といった具体的な「言葉」によってやりがいを感じて介護をするケースが多いことが明らかになった。

さらに、配偶者間介護と親子間介護とでやりがいに差異があるかどうかを明らかにするために χ^2 検定を行ったが、有意な差異は見られなかった。

(e) 介護継続の条件

介護を続けていくために必要な条件について複数回答を求めた（Table 5-4）。

全体で最も多く選択された条件は、「1 介護者が健康であること」（93.9%）であり、ついで、「5 介護者に代わりがいること」（63.6%）、「11 協力的な医療機関の存在」（58.7%）、「17 経済的に恵まれている」（56.5%）、「3 介護者が愛情をもっていること」（53.7%）と続いている。

配偶者間で介護関係を形成している「夫」と「妻」とで条件に違いがあるかどうかを確

Table 5-4 現在の介護に対する態度(4)【e. 介護継続の条件】

現在の介護に対する態度	配偶者間				配偶者合計	親子間					親子合計	全体合計				
	1 夫		2 妻			3 息子	4 娘	5 嫁								
(e) 介護継続の条件																
1 介護者が健康であること	72	91.1%	175	91.1%	247	91.1%	52	94.5%	191	97.0%	258	94.2%	501	95.2%	748	93.9%
2 介護者が高齢でないこと	33	41.8%	81	42.2%	114	42.1%	14	25.5%	100	50.8%	136	49.6%	250	47.5%	364	45.7%
3 介護者が愛情をもっていること	35	44.3%	94	49.0%	129	47.6%	31	56.4%	128	65.0%	140	51.1%	299	56.8%	428	53.7%
4 介護者が無職であること	29	36.7%	75	39.1%	104	38.4%	9	16.4%	45	22.8%	51	18.6%	105	20.0%	209	26.2%
5 介護者に代わりがいること	29	36.7%	91	47.4%	120	44.3%	34	61.8%	147	74.6%	206	75.2%	387	73.6%	507	63.6%
6 家族の具体的協力・分担	28	35.4%	63	32.8%	91	33.6%	28	50.9%	87	44.2%	161	58.8%	276	52.5%	367	46.0%
7 同居家族以外の親族からの協力負担	12	15.2%	16	8.3%	28	10.3%	16	29.1%	63	32.0%	77	28.1%	156	29.7%	184	23.1%
8 公的な家事・介護の援助	38	48.1%	83	43.2%	121	44.6%	30	54.5%	116	58.9%	130	47.4%	276	52.5%	397	49.8%
9 近隣・ボランティアの協力	14	17.7%	31	16.1%	45	16.6%	10	18.2%	22	11.2%	34	12.4%	66	12.5%	111	13.9%
10 家族・親せき・近隣の精神的支え	22	27.8%	71	37.0%	93	34.3%	11	20.0%	85	43.1%	111	40.5%	207	39.4%	300	37.6%
11 協力的な医療機関の存在	43	54.4%	112	58.3%	155	57.2%	30	54.5%	129	65.5%	154	56.2%	313	59.5%	468	58.7%
12 適切な相談・指導機関の存在	32	40.5%	95	49.5%	127	46.9%	23	41.8%	94	47.7%	133	48.5%	250	47.5%	377	47.3%
13 いつも話し合える仲間の存在	20	25.3%	73	38.0%	93	34.3%	9	16.4%	86	43.7%	121	44.2%	216	41.1%	309	38.8%
14 住宅条件に恵まれている	22	27.8%	65	33.9%	87	32.1%	17	30.9%	93	47.2%	111	40.5%	221	42.0%	308	38.6%
15 ショートステイ・宅老的制度	24	30.4%	69	35.9%	93	34.3%	22	40.0%	96	48.7%	161	58.8%	279	53.0%	372	46.7%
16 気晴らしや趣味、社会活動が続けられる	26	32.9%	70	36.5%	96	35.4%	17	30.9%	114	57.9%	141	51.5%	272	51.7%	368	46.2%
17 経済的に恵まれている	39	49.4%	92	47.9%	131	48.3%	32	58.2%	133	67.5%	154	56.2%	319	60.6%	450	56.5%
18 介護期間があまり長くない	23	29.1%	49	25.5%	72	26.6%	13	23.6%	66	33.5%	106	38.7%	185	35.2%	257	32.2%
19 その他	3	3.8%	3	1.6%	6	2.2%	1	1.8%	3	1.5%	4	1.5%	8	1.5%	14	1.8%
合計	79	100.0%	192	100.0%	271	100.0%	55	100.0%	197	100.0%	274	100.0%	526	100.0%	797	100.0%

かめるために χ^2 検定を行ったところ、「13 いつも話し合える仲間の存在」においては、有意水準には満たなかったものの、「妻」の選択率の方が高い傾向が見られた(38.0%) ($\chi^2(1)=3.4 p<.10$)。それ以外の条件においては、有意差は見られなかった。すなわち、介護を続けていくために必要な条件は、「夫」と「妻」とでほとんど変わらないことが明らかになった。

次に、親子間で介護関係を形成している「息子」「娘」「嫁」とで条件に差異があるかどうかを確かめるために χ^2 検定を行った。その結果、「2 介護者が高齢でないこと」($\chi^2(2)=12.0 p<.01$)、「3 介護者が愛情をもっていること」($\chi^2(2)=9.0 p<.05$)、「6 家族の具体的協力・分担」($\chi^2(2)=9.8 p<.01$)、「8 公的な家事・介護の援助」($\chi^2(2)=6.1 p<.05$)、「10 家族・親せき・近隣の精神的支え」($\chi^2(2)=9.9 p<.01$)、「13 いつも話し合える仲間の存在」($\chi^2(2)=15.4 p<.001$)、「15 ショートステイ・宅老的制度」($\chi^2(2)=8.8 p<.05$)、「16 気晴らしや趣味、社会活動が続けられる」($\chi^2(2)=12.5 p<.01$)、「17 経済的に恵まれている」($\chi^2(2)=6.2 p<.05$)においては、有意な結果が見られた。また、「11 協力的な医療機関の存在」($\chi^2(2)=4.7 p<.10$)、「14 住宅条件に恵まれている」($\chi^2(2)=5.2 p<.10$)、「18 介護期間があまり長くない」($\chi^2(2)=4.9 p<.10$)においては、有意水準には満たなかったものの、傾向が見られた。

そこで、それぞれの条件について残差分析を行った結果、「娘」の選択率が高く、「嫁」のそれが低い条件としては、「3 介護者が愛情をもっていること」(娘：(65.0%) $d=2.9 p<.01$ 、嫁：(51.1%) $d=-2.8 p<.01$)、「8 公的な家事・介護の援助」(娘：(58.9%) $d=2.3 p<.01$ 、嫁：(47.4%) $d=-2.4 p<.05$)、「17 経済的に恵まれている」(娘：(67.5%) $d=2.5 p<.05$ 、嫁：(56.2%) $d=-2.2 p<.05$)があり、逆に、「嫁」の選択率が高く、「娘」のそれが低い条件としては、「6 家族の具体的協力・分担」(娘：(44.2%) $d=-3.0 p<.01$ 、嫁：(58.8%) $d=3.0 p<.01$)があった。「息子」の選択率が低く、「娘」や「嫁」のそれの方が高い条件として、「16 気晴らしや趣味、社会活動が続けられる」(息子：(30.9%) $d=-3.3 p<.01$ 、娘：(57.9%) $d=2.2 p<.05$)や「15 ショートステイ・宅老的制度」(息子：(40.0%) $d=-2.0 p<.05$ 、嫁：(58.8%) $d=2.7 p<.01$)があった。なお、他の介護者の選択率が低く、「息子」の選択率が高い条件はなく、逆に、「息子」のそれだけが低い条件として、「2 介護者が高齢でないこと」(息子：(25.5%) $d=-3.5 p<.01$)、「10 家族・親せき・近隣の精神的支え」(息子：(20.0%) $d=-3.1 p<.01$)、「13 いつも話し合える仲間の存在」(息子：(16.4%) $d=-3.9 p<.01$)があった。

χ^2 検定で傾向水準が見られた条件についても残差分析を行った結果、「11 協力的な医

療機関の存在」においては、「娘」の選択率が高かった（65.5%）（ $d=2.2$ $p<.05$ ）。また、「14 住宅条件に恵まれている」においては、「嫁」の選択率が高く（47.2%）（ $d=1.9$ $p<.10$ ）、「息子」のそれが低かった（30.9%）（ $d=-1.8$ $p<.10$ ）。さらに、「18 介護期間があまり長くない」においても、「嫁」の選択率が高く（38.7%）（ $d=1.8$ $p<.10$ ）、「息子」のそれが低かった（23.6）（ $d=-1.9$ $p<.10$ ）。

さらに、配偶者間介護と親子間介護とで介護を継続する条件に差異が存在するかどうかを明らかにするために χ^2 検定を行った。その結果、「1 介護者が健康であること」（93.9%）（ $\chi^2(1)=4.5$ $p<.05$ ）、「3 介護者が愛情をもっていること」（53.7%）（ $\chi^2(1)=5.7$ $p<.05$ ）、「5 介護者に代わりがいること」（63.6%）（ $\chi^2(1)=65.0$ $p<.001$ ）、「6 家族の具体的協力・分担」（46.0）（ $\chi^2(1)=24.9$ $p<.001$ ）、「7 同居家族以外の親族からの協力負担」（23.0）（ $\chi^2(1)=36.5$ $p<.001$ ）、「8 公的な家事・介護の援助」（49.8%）（ $\chi^2(1)=4.0$ $p<.05$ ）、「14 住宅条件に恵まれている」（38.6%）（ $\chi^2(1)=6.9$ $p<.01$ ）、「15 ショートステイ・宅老的制度」（46.7%）（ $\chi^2(1)=24.4$ $p<.001$ ）、「16 気晴らしや趣味、社会活動が続けられる」（46.2%）（ $\chi^2(1)=18.4$ $p<.001$ ）、「17 経済的に恵まれている」（56.5%）（ $\chi^2(1)=10.5$ $p<.01$ ）、「18 介護期間があまり長くない」（32.2%）（ $\chi^2(1)=5.1$ $p<.05$ ）において、親子間介護の方の選択率の方が配偶者間介護の選択率に比べて有意に高い結果が見られた。また、「4 介護者が無職であること」（38.4%）（ $\chi^2(1)=30.4$ $p<.001$ ）については、配偶者間介護の方が、親子間介護よりも選択率が有意に高かった。なお、「13 いつも話し合える仲間の存在」（38.8%）（ $\chi^2(1)=3.1$ $p<.10$ ）においては、同様に、親子間介護の選択率の方が高い傾向がみられた。

(f) 介護に対する感想

自分自身が行っている毎日の介護に対して抱いている感想について、複数回答を求めた（Table 5-5）。

全体で最も多く選択された感想は、「1 当たり前のことをしている」（66.1%）であり、これに、「6 最後までお世話したい」（44.2%）が続き、毎日の介護をポジティブに前向きにとらえている介護者が多いが、反面、「2 他にする人がいないので仕方ない」（42.0%）とあきらめの介護者や、「5 一日でよいから解放されたい」（22.3%）や「3 もう少し手伝って欲しい」（19.4%）のようにネガティブに不満を持ってとらえている介護者も比較的少数あることが分かった。

配偶者間で介護関係を形成している「夫」と「妻」とで感想に違いがあるかどうかを確

Table 5-5 現在の介護に対する態度(5)【f. 介護に対する感想】

現在の介護に対する態度	配偶者間		配偶者合計	親子間			親子合計	全体合計								
	1夫	2妻		3息子	4娘	5嫁										
(f) 介護に対する感想																
1 当たり前のことをしている	64	81.0%	147	76.6%	211	77.9%	37	67.3%	128	65.0%	151	55.1%	316	60.1%	527	66.1%
2 他に人がいないので仕方ない	37	46.8%	79	41.1%	116	42.8%	22	40.0%	70	35.5%	127	46.4%	219	41.6%	335	42.0%
3 もう少し手伝って欲しい	10	12.7%	26	13.5%	36	13.3%	9	16.4%	41	20.8%	69	25.2%	119	22.6%	155	19.4%
4 不公平を感じる	2	2.5%	4	2.1%	6	2.2%	5	9.1%	12	6.1%	38	13.9%	55	10.5%	61	7.7%
5 一日でよいから解放されたい	13	16.5%	45	23.4%	58	21.4%	11	20.0%	48	24.4%	61	22.3%	120	22.8%	178	22.3%
6 最後までお世話したい	36	45.6%	96	50.0%	132	48.7%	19	34.5%	92	46.7%	109	39.8%	220	41.8%	352	44.2%
7 このまま在宅介護の継続は困難	14	17.7%	27	14.1%	41	15.1%	7	12.7%	26	13.2%	45	16.4%	78	14.8%	119	14.9%
8 その他	7	8.9%	11	5.7%	18	6.6%	1	1.8%	14	7.1%	20	7.3%	35	6.7%	53	6.6%
合計	79	100.0%	192	100.0%	271	100.0%	55	100.0%	197	100.0%	274	100.0%	526	100.0%	797	100.0%

かめるために χ^2 検定を行った。しかし、どの感想においても、有意差は見られなかった。すなわち、毎日の介護に対する感想は、「夫」と「妻」で違わないことが分かった。

次に、親子間で介護関係を形成している「息子」「娘」「嫁」とで感想に差異があるかどうかを確かめるために χ^2 検定を行った。その結果、「4 不公平を感じる」において有意な結果が見られ ($\chi^2(2)=7.5 p<.05$)、残差分析を行ったところ、「娘」の選択率が低く (6.1%) ($d=-2.5 p<.05$)、「嫁」の選択率が高い (13.9%) ($d=2.7 p<.01$) ことが分かった。また、有意水準には満たなかったものの、「1 当たり前のことをしている」 ($\chi^2(2)=5.7 p<.10$) においては、「娘」の選択率が高く (65.0%) ($d=1.7 p<.10$)、「嫁」の選択率が低い (55.1%) ($d=-2.4 p<.05$) という傾向が見られた。また、「2 他に人がいないので仕方ない」 (46.4%) ($\chi^2(2)=5.5 p<.10$) においては、「娘」の選択率が低く (36.5%) ($d=-2.2 p<.05$)、「嫁」の選択率が高い ($d=2.3 p<.05$) という傾向が見られた。

さらに、配偶者間介護と親子間介護とで感想に差異があるかどうかを明らかにするために χ^2 検定を行った。その結果、「1 当たり前のことをしている」に有意な結果が見られ ($\chi^2(1)=24.1 p<.001$)、配偶者間介護 (77.9%) の方が、親子間介護 (66.1%) よりも選択率が高かった。逆に、「3 もう少し手伝って欲しい」 ($\chi^2(1)=9.3 p<.01$) や「4 不公平を感じる」 ($\chi^2(1)=16.0 p<.001$) においても有意な結果が見られたが、これらの感想の選択率は、配偶者間介護 (13.3%、2.2%) よりも親子間介護の選択率 (22.6、10.5) の方が高かった。なお、「6 最後までお世話したい」においては、有意水準には満たなかったものの、配偶者間介護の選択率 (48.7%) の方が高い傾向が見られた ($\chi^2(1)=3.1 p<.10$)。

(6) 将来の介護に対する態度

(a) 介護ができなくなった時どうなると思うか

仮に、あなた自身が現在のように介護ができなくなった時にどのようなになると思うかについて複数回答を求めた（Table 6-1）。

全体で最も多く選択された対応策は、「8 福祉施設を利用したい」（60.1％）であり、以下、「7 ケアマネージャーに相談したい」（55.6％）、「4 ヘルパー・家政婦を利用したい」（24.3％）と続いている。

配偶者間で介護関係を形成している「夫」と「妻」とで対応策に違いがあるかどうかを確かめるために χ^2 検定を行ったところ、「1 家族が介護できる」において有意な結果が見られ（ $\chi^2(1)=4.2 p<.05$ ）、「妻」（22.4％）よりも「夫」（35.4％）の方が多く選択していた。「5 市役所・町役場に相談したい」においては、有意水準には満たなかったものの「夫」の選択率（30.4％）の方が高い傾向が見られた（ $\chi^2(1)=3.7 p<.10$ ）。

次に、親子間で介護関係を形成している「息子」「娘」「嫁」とで対応策に差異があるかどうかを確かめるために χ^2 検定を行った。その結果、「1 家族が介護できる」（ $\chi^2(2)=19.0 p<.001$ ）、「5 市役所・町役場に相談したい」（ $\chi^2(2)=6.2 p<.05$ ）、「8 福祉施設を利用したい」（ $\chi^2(2)=10.2 p<.01$ ）で有意な結果が見られた。また、「4 ヘルパー・家政婦を利用したい」（ $\chi^2(2)=4.6 p<.10$ ）や「7 ケアマネージャーに相談したい」（ $\chi^2(2)=10.2 p<.10$ ）においては、傾向水準の結果が見られた。そこで、それぞれの対応策について残差分析を行った結果、「息子」の選択率が高く、「嫁」のそれが低い対応策としては、

Table 6-1 将来の介護に対する態度(1)【a. 自分が介護できなくなったときの介護予想】

将来の介護に対する態度	配偶者間		配偶者合計	親子間			親子合計	全体合計
	1 夫	2 妻		3 息子	4 娘	5 嫁		
(a) 自分が介護できなくなったときの介護予想								
1 家族が介護できる	28 35.4%	43 22.4%	71 26.2%	20 36.4%	22 11.2%	52 19.0%	94 17.9%	165 20.7%
2 親せきに頼む	6 7.6%	9 4.7%	15 5.5%	8 14.5%	25 12.7%	36 13.1%	69 13.1%	84 10.5%
3 近所・友人に協力を求める	1 1.3%		1 0.4%	2 3.6%		1 0.4%	3 0.6%	4 0.5%
4 ヘルパー・家政婦を利用したい	24 30.4%	50 26.0%	74 27.3%	11 20.0%	55 27.9%	54 19.7%	120 22.8%	194 24.3%
5 市役所・町役場に相談したい	24 30.4%	36 18.8%	60 22.1%	14 25.5%	35 17.8%	35 12.8%	84 16.0%	144 18.1%
6 民生児童委員に相談したい	9 11.4%	16 8.3%	25 9.2%	2 3.6%	17 8.6%	13 4.7%	32 6.1%	57 7.2%
7 ケアマネージャーに相談したい	42 53.2%	108 56.3%	150 55.4%	25 45.5%	120 60.9%	148 54.0%	293 55.7%	443 55.6%
8 福祉施設を利用したい	41 51.9%	99 51.6%	140 51.7%	26 47.3%	123 62.4%	190 69.3%	339 64.4%	479 60.1%
9 その他	3 3.8%	1 0.5%	4 1.5%	1 1.8%	1 0.5%	4 1.5%	6 1.1%	10 1.3%
10 考えていない	3 3.8%	10 5.2%	13 4.8%	1 1.8%	4 2.0%	10 3.6%	15 2.9%	28 3.5%
合計	79 100.0%	192 100.0%	271 100.0%	55 100.0%	197 100.0%	274 100.0%	526 100.0%	797 100.0%

「5 市役所・町役場に相談したい」(息子：(25.5%) $d=2.0$ $p<.05$ 、嫁：(12.8%) $d=-2.1$ $p<.05$)があり、逆に、「嫁」の選択率が高く、「息子」のそれが低い対応策としては、「8 福祉施設を利用したい」(息子：(47.3%) $d=-2.8$ $p<.01$ 、嫁：(69.3%) $d=2.4$ $p<.05$)があった。また、「息子」の選択率が高く、「娘」のそれが低い対応策としては、「1 家族が介護できる」(息子：(36.4%) $d=3.8$ $p<.01$ 、娘：(11.2%) $d=-3.1$ $p<.01$)があった。なお、有意水準には満たなかったが、「4 ヘルパー・家政婦を利用したい」(娘：(27.9%) $d=2.2$ $p<.05$ 、嫁：(19.7%) $d=-1.8$ $p<.10$)においては、「娘」の選択率が高く、「嫁」のそれが低い傾向が、「7 ケアマネージャーに相談したい」(娘：(60.9%) $d=1.9$ $p<.10$)においては、「娘」の選択率が高い傾向が見られた。

さらに、配偶者間介護と親子間介護とで対応策に差異があるかどうかを明らかにするために χ^2 検定を行った。その結果、「1 家族が介護できる」(26.2%) ($\chi^2(1)=7.0$ $p<.01$)、「5 市役所・町役場に相談したい」(22.1%) ($\chi^2(1)=4.1$ $p<.05$)においては、配偶者間介護の方が、親子間介護よりも選択率が高いが、「2 親せきに頼む」(10.5%) ($\chi^2(1)=10.1$ $p<.01$)や「8 福祉施設を利用したい」(60.1%) ($\chi^2(1)=11.6$ $p<.01$)においては、親子間介護の方が選択率が高かった。

(b) 自分自身の被介護意向

仮に、介護者自身が要介護者になった場合に、どのようにしたいと思うかについて、最も希望する被介護様式を選択するように求めた (Table 6-2-1)。

全体で最も多く選択された被介護様式は、「6 福祉サービスを利用して自宅で」(24.5%)であり、以下、「8 老健に入りたい」(13.7%)、「1 自宅で配偶者に」(12.8%)と続いている。

配偶者間で介護関係を形成している「夫」と「妻」とで希望する被介護様式に違いがあるかどうかを確かめるために、まず選択項目を、「1 自宅で配偶者に」「2 自宅で息子や嫁に」「3 自宅で娘に」「4 独立した子どもや親せきと同居」を「自宅で家族に」に、「5 近所や知人の力を借りて自宅で」「6 福祉サービスを利用し自宅で」を「自宅で他人に」に、「7 特養に入りたい」「8 老健に入りたい」「9 病院に入りたい」「10 有料老人ホームに入りたい」を「施設」にコード化し、「11 その他」および「無回答」を分析対象から除外して、 χ^2 検定を行った。その結果 (Table 6-2-2)、どの被介護様式においても、有意な結果は見られなかった。すなわち、自分が将来希望する被介護様式は、「夫」と「妻」とで違わないことが明らかになった。

Table 6-2-1 将来の介護に対する態度(2.1)【b. 自分自身の被介護意向】

将来の介護に対する態度	配偶者間		配偶者合計	親子間			親子合計	全体合計								
	1 夫	2 妻		3 息子	4 娘	5 嫁										
(b) 自分自身の被介護意向																
1 自宅で配偶者に	7	10.8%	12	7.1%	19	8.1%	17	34.7%	20	11.7%	34	13.7%	71	15.1%	90	12.8%
2 自宅で息子や嫁に	11	16.9%	26	15.4%	37	15.8%	2	4.1%	3	1.8%	9	3.6%	14	3.0%	51	7.3%
3 自宅で娘に	4	6.2%	12	7.1%	16	6.8%	2	4.1%	16	9.4%	11	4.4%	29	6.2%	45	6.4%
4 独立した子どもや親せきと同居	0	0.0%	3	1.8%	3	1.3%	2	4.1%	0	0.0%	4	1.6%	6	1.3%	9	1.3%
5 近所や知人の力を借りて自宅で	1	1.5%	1	0.6%	2	0.9%	0	0.0%	0	0.0%	2	0.8%	2	0.4%	4	0.6%
6 福祉サービスを利用し自宅で	12	18.5%	46	27.2%	58	24.8%	5	10.2%	57	33.3%	52	20.9%	114	24.3%	172	24.5%
7 特養に入りたい	8	12.3%	13	7.7%	21	9.0%	3	6.1%	16	9.4%	25	10.0%	44	9.4%	65	9.2%
8 老健に入りたい	8	12.3%	14	8.3%	22	9.4%	7	14.3%	21	12.3%	46	18.5%	74	15.8%	96	13.7%
9 病院に入りたい	5	7.7%	18	10.7%	23	9.8%	4	8.2%	7	4.1%	17	6.8%	28	6.0%	51	7.3%
10 有料老人ホームに入りたい	1	1.5%	12	7.1%	13	5.6%	2	4.1%	20	11.7%	29	11.6%	51	10.9%	64	9.1%
11 その他	3	4.6%	5	3.0%	8	3.4%	3	6.1%	5	2.9%	12	4.8%	20	4.3%	28	4.0%
無回答	5	7.7%	7	4.1%	12	5.1%	2	4.1%	6	3.5%	8	3.2%	16	3.4%	28	4.0%
合計	65	100.0%	169	100.0%	234	100.0%	49	100.0%	171	100.0%	249	100.0%	469	100.0%	703	100.0%

Table 6-2-2 将来の介護に対する態度(2.2)【b. 自分自身の被介護意向(項目合成後)】

将来の介護に対する態度	配偶者間		配偶者合計	親子間			親子合計	全体合計								
	1 夫	2 妻		3 息子	4 娘	5 嫁										
(b) 自分自身の被介護意向 (項目合成後)																
1 自宅で家族に	22	38.6%	53	33.8%	75	35.0%	23	52.3%	39	24.4%	58	25.3%	120	27.7%	195	30.1%
2 自宅で他人に	13	22.8%	47	29.9%	60	28.0%	5	11.4%	57	35.6%	54	23.6%	116	26.8%	176	27.2%
3 施設	22	38.6%	57	36.3%	79	36.9%	16	36.4%	64	40.0%	117	51.1%	197	45.5%	276	42.7%
合計	57	100.0%	157	100.0%	214	100.0%	44	100.0%	160	100.0%	229	100.0%	433	100.0%	647	100.0%

次に、親子間で介護関係を形成している「息子」「娘」「嫁」とで被介護様式に差異があるかどうかを確かめるために χ^2 検定を行った。その結果、有意な結果が見られ(52.3%) ($\chi^2(4)=23.5 p<.001$)、残差分析を行ったところ、「1 自宅で家族に」においては「息子」($d=3.8 p<.01$)の選択率が高かった。また、「2 自宅で他人に」においては、「娘」の選択率が高く($d=3.2 p<.01$)く、逆に「息子」の選択率が低かった(11.4%) ($d=-2.4 p<.05$)。さらに、「3 施設」については、「嫁」の選択率が高く(51.1%) ($d=2.5 p<.05$)、逆に「娘」の選択率が低い傾向が見られた(40.0%) ($d=-1.8 p<.10$)。

さらに、配偶者間介護と親子間介護とで被介護様式差異が存在するかどうかを明らかにするために χ^2 検定を行った。その結果、有意水準には満たなかったものの傾向水準の結果が見られ($\chi^2(2)=5.1 p<.10$)、残差分析を行ったところ、「1 自宅で家族に」においては、配偶者間介護の選択率が高く(30.5%) ($d=1.9 p<.05$)、「3 施設」においては、親子

Table 6-3 将来の介護に対する態度(3)【c. 老後を楽しく生きるための条件】

将来の介護に対する態度	配偶者間		配偶者合計	親子間			親子合計	全体合計
	1夫	2妻		3息子	4娘	5嫁		
(c) 老後を楽しく生きるための条件								
1 仕事や家庭内での役割	15 19.0%	60 31.3%	75 27.7%	18 32.7%	59 29.9%	105 38.3%	182 34.6%	257 32.2%
2 家族の愛情	57 72.2%	131 68.2%	188 69.4%	31 56.4%	132 67.0%	199 72.6%	362 68.8%	550 69.0%
3 お金	48 60.8%	109 56.8%	157 57.9%	27 49.1%	136 69.0%	178 65.0%	341 64.8%	498 62.5%
4 友人・知人	31 39.2%	101 52.6%	132 48.7%	13 23.6%	118 59.9%	166 60.6%	297 56.5%	429 53.8%
5 趣味や生き甲斐	40 50.6%	101 52.6%	141 52.0%	34 61.8%	145 73.6%	211 77.0%	390 74.1%	531 66.6%
6 自分や家族の健康	54 68.4%	146 76.0%	200 73.8%	41 74.5%	154 78.2%	242 88.3%	437 83.1%	637 79.9%
7 保健福祉など社会的援助	40 50.6%	93 48.4%	133 49.1%	20 36.4%	104 52.8%	123 44.9%	247 47.0%	380 47.7%
8 となり近所の助け合い	18 22.8%	62 32.3%	80 29.5%	11 20.0%	49 24.9%	81 29.6%	141 26.8%	221 27.7%
9 社会奉仕活動等の社会的満足感	10 12.7%	25 13.0%	35 12.9%	9 16.4%	40 20.3%	39 14.2%	88 16.7%	123 15.4%
10 その他	1 1.3%	3 1.6%	4 1.5%		3 1.5%	3 1.1%	6 1.1%	10 1.3%
合計	79 100.0%	192 100.0%	271 100.0%	55 100.0%	197 100.0%	274 100.0%	526 100.0%	797 100.0%

間介護の選択率が高いという傾向が見られた (42.7%) ($d=2.1 p<.05$)。

(c) 老後を楽しく生きていくために必要なもの

介護者が老後を楽しく生きていくために必要と考えるものについて、複数回答を求めた (Table 6-3)。

全体で最も多く選択された必要なものは、「6 自分や家族の健康」(79.9%)であり、以下、「2 家族の愛情」(69.0%)、「5 趣味や生き甲斐」(66.6%)、「3 お金」(62.5%)、「4 友人・知人」(53.8%)と続き、半数以上の人がこれらを選択している。

配偶者間で介護関係を形成している「夫」と「妻」とで必要なものに違いがあるかどうかを確かめるために χ^2 検定を行ったところ、「1 仕事や家庭内での役割」において有意な結果が見られ ($\chi^2(1)=4.2 p<.05$)、「妻」(31.3%)の方が「夫」(19.0%)よりもこれを多く選択していた。逆に、「4 友人・知人」においては、有意水準には満たなかったものの、「夫」(39.2%)よりも「妻」(52.6%)の方が多く選択する傾向が見られた ($\chi^2(1)=3.4 p<.10$)。

次に、親子間で介護関係を形成している「息子」「娘」「嫁」とで必要なものに差異があるかどうかを確かめるために χ^2 検定を行った結果、「2 家族の愛情」($\chi^2(1)=6.1 p<.05$)、「3 お金」($\chi^2(1)=7.5 p<.05$)、「4 友人・知人」($\chi^2(1)=26.9 p<.001$)、「6 自分や家族の健康」($\chi^2(1)=11.5 p<.01$)において有意な結果が見られた。また、有意水準には満たなかったものの、「5 趣味や生き甲斐」($\chi^2(1)=5.5 p<.10$)や「7 保健福祉な

ど社会的援助」($\chi^2(1)=5.6 p<.10$)において傾向水準の結果が見られた。

そこで、それぞれについて残差分析を行った結果、「嫁」の選択率が高く、「息子」のそれが低いものとしては、「2 家族の愛情」(息子：(56.4%) $d=-2.1 p<.05$ 、嫁：(72.6%) $d=2.0 p<.05$)と「4 友人・知人」(息子：(60.6%) $d=-5.2 p<.01$ 、嫁：(23.6%) $d=2.0 p<.05$)があった。また、「6 自分や家族の健康」(息子：(74.5%) $d=-2.1 p<.05$ 、娘：(78.2%) $d=-2.3 p<.05$ 、嫁：(88.3%) $d=3.3 p<.01$)においては、「嫁」の選択率が高い一方で、「息子」や「娘」といった実子のそれが低かった。なお、有意水準には満たなかったが、「5 趣味や生き甲斐」においては、「息子」の選択率が低く(61.8%) ($d=-2.2 p<.05$)、「7 保健福祉など社会的援助」においては、同様に、「息子」の選択率が低く、「娘」の選択率が高い(息子：(36.4%) $d=-1.7 p<.10$ 、嫁：(52.8%) $d=2.1 p<.05$)という傾向が見られた。

さらに、配偶者間介護と親子間介護とで違いがあるかどうかを明らかにするために χ^2 検定を行った結果、「4 友人・知人」(53.8%) ($\chi^2(1)=4.0 p<.05$)、「5 趣味や生き甲斐」(66.6%) ($\chi^2(1)=38.35 p<.01$)、「6 自分や家族の健康」(79.9%) ($\chi^2(1)=9.0 p<.01$)において有意な結果が見られ、いずれにおいても、親子間介護の方が、配偶者間介護よりも選択率が高かった。なお、「1 仕事や家庭内での役割」(32.2%) ($\chi^2(1)=3.1 p<.10$)と「3 お金」(62.5%) ($\chi^2(1)=3.3 p<.10$)、については、有意水準には満たなかったものの、親子間介護の選択率の方が高かった。

【考 察】

(1) 介護理由について（どのような意味づけがなされているか）

一般に「介護の責任は配偶者が負うもの」という社会的規範は存在する。この規範の下では、配偶者が介護出来る状態であれば、おのずとその配偶者に責任が生じる。しかし、その配偶者が不在、もしくは介護できない状態であれば、次に介護責任が生じるのは、彼らの子どもであろう。子どもでも、一人っ子の場合もあれば、複数のきょうだいがいる場合もある。ところが、要介護者に子どもがいない場合、要介護者のきょうだいやその子ども(甥やめい)等に責任が生じることになる。いづれにせよ、親子間で介護を行う場合は、限られた状況(例えば、一人っ子等)を除けば、配偶者間で介護を行う場合とは異なり、介護責任は分散される。したがって、配偶者間介護における介護理由と親子間介護におけるそれとは、個々の人間関係による違いに加えて、こうした介護責任のあり方の違いも、

影響していると考えられる。

実際、介護するのは「続柄として当然」とする介護者は、親子間介護よりも配偶者間介護において、一層高い比率で存在していた。一方で、親子間介護に携わっている「息子」「娘」「嫁」の三者間の比較からそれぞれの特徴が明らかになった。分析で取り上げた4つの介護理由は、「介護への姿勢」と「主たる介護者となる他者の存在」の2観点から特徴づけることが出来よう。すなわち、「1 続柄として当然」を選択する介護者は、自分以外に主たる介護者になりえる他者がいなく、介護への姿勢は積極的と思われる。「2 他に適当な人がいない」を選択する介護者は、自分以外に主たる介護者になりえる他者はいないが、介護への姿勢はそれほど積極的でないと思われる。「3 自分の方がよくできるので」を選択する介護者は、自分以外に主たる介護者になりえる他者はいるが、介護への姿勢は積極的と思われる。「4 結局自分がすることに」を選択する介護者は、自分以外に主たる介護者になりえる他者の存在を否定していないものの、介護への姿勢は積極的なものとはいえない。

これらの介護理由に基づいてみると、要介護者と実子関係にある「息子」や「娘」と義理関係にある「嫁」との間に異なる傾向がある。すなわち、介護への姿勢が積極的な「1 続柄として当然」は、実子である「息子」や「娘」が選択することが多く、介護への姿勢が積極的でない「2 他に適当な人いない」は、「嫁」の選択が多かった。また、「息子」の場合は、居住形態の違いがほとんど影響しないが、「娘」の場合は、「介護時より同居・別居」群では、「以前より同居している」群に比べて、「3 自分の方がよくできるので」や「4 結局自分がすることに」といった、自分以外に主たる介護者になりえる他者がいる理由の選択が多くなっている。このような居住形態で介護を行っている場合、多くが、自分以外にも介護者になりえる他者がいる状況の中で介護者になっているということが示唆された。また、「嫁」の場合、「以前より同居している」嫁は、「1 続柄として当然」という積極的な介護姿勢を示すが、「介護時より同居・別居」の嫁は、「4 結局自分がすることに」という積極的ではない姿勢のものが多かった。すなわち、介護が生じる以前から同居家族であったか否かということが、「嫁」が介護する場合に、大きな影響を及ぼすことが明らかになった。

このように、特に親子間介護を検討する上で、居住形態は、介護が生じるまでの家族のあり方を示すものである。介護に至る経緯や、今なされている介護状況への受け止め方へを検討していくための重要な要因となることが示された。

(2) 実際の介護について（何に気をつけ、何に困難と感じ、何を必要としているのか）

介護の大きな側面として、老化等で身体的機能が低下したために生じた日常生活動作能力を補完すべく行う手助け・支援があげられる。もちろん、その中には、痴呆などの精神機能の低下への支援等も含まれる。この低下した機能に対する支援のような具体的なサポートが中心と思われがちな介護の中で、「気をつけていること」で明らかになったことの一つとして、情緒的サポート、すなわち、「3 できるだけ一人にさせない」「4 話を聞くようにしている」といった項目の選択傾向に、続柄による違いが見られたことがある。すなわち、これらのことに気をつけている介護者が、親子間介護よりも配偶者間介護の方に一層多いことである。なお、親子間介護に携わる「息子」と「娘」では、「娘」の方が一層そのことに気をつけているのである。これは、情緒的な結びつきの強さを示すものであると考えられる。しかしながら、当然、夫婦であっても、娘であっても、情緒的な結びつきの強いケースと弱いケースが存在するものであり、続柄のみで両者の関係のあり方を言い切れるものではない。介護において、要介護者に対して情緒的サポートを向けるということが、介護状況など、他の要因に影響を及ぼすものといえるのではないだろうか。今後の研究で明らかにしていく必要があるだろう。

また、「困難に感じていること」で明らかになったのは、配偶者間介護に携わっている介護者が、「2 安心して眠れない」「5 肉体的負担が大きい」「8 介護者自身の健康に不安」「16 経済的な負担が大きい」ことを困難と感じていることである。その一方で、親子間介護に携わっている介護者は、「3 外出が制限される」「4 ストレスがたまる」「7 仕事との両立ができない」「14 来客が制限される」ことを困難と感じていることである。配偶者間で介護している「夫」や「妻」が感じる介護への困難は、「体力」や「経済力」といった自己の持つリソースが減少することに関するものであり、親子間で介護している「息子」「娘」「嫁」が感じる困難は、日常生活が制限される、両立できなくなるといったこと、介護以外の生活への影響に関するものと言えないだろうか。

さらに、「介護を継続するために必要なこと」では、配偶者間介護に携わる介護者は、「4 介護者が無職であること」を多く選択するのに対して、親子間介護に携わる介護者は、「1 介護者が健康であること」「3 介護者が愛情をもっていること」「5 介護者に代わりがいること」「6 家族の具体的協力・分担」「7 同居家族以外の親族からの協力負担」「8 公的な家事・介護の援助」「14 住宅条件に恵まれている」「15 ショートステイ・宅老的制度」「16 気晴らしや趣味、社会活動が続けられる」「17 経済的に恵まれている」「18 介護期間があまり長くない」を必要条件として選択している。配偶者を介護することと、親

を介護することでは、同じ家事労働の一つである介護であっても、その意味合いは大きく異なっていることを示唆する結果となった。一般的に考えると、子どもとして親を介護した後には配偶者を介護する。親を介護しているときは、年齢も相対的に若く、社会的な役割も担っている場合が多いので、社会的なネットワークも豊富である。また、他のきょうだいが存在し、親の介護責任も介護者、もしくはその家族に限定されるものとも限らない。そのような状況の中から、介護を続けるには、他の生活と介護が両立できることを求めるのであろう。その一方で、配偶者を介護する段階では、介護者も年齢を重ねており、社会的な役割からもリタイアするので、現役の頃にくらべて社会的なネットワークも縮小していると思われる。また、介護責任も配偶者に集中する。そうした状況で行う介護は、時間的・経済的・肉体的な資源のかなりの部分を介護に注ぎながら介護を行っており、その限られた資源が減少し、枯渇してしまうことに不安を感じていると思われる。

(3) 介護のやりがい、感想について（何に満足し、介護状況をどう受け止めているのか）

「介護のやりがい」とは、何によって援助の成果を認知しているかということである。分析で取り上げた4つのやりがいは、対象（誰から）と、内容（ことがら）によって特徴づけることが出来る。すなわち、「1 気持ちよさそうにしている」は、要介護者の状態によってやりがいを感じていることを示すものである。また、「2 家族が手伝ってくれる」は、家族が実際に手伝ってくれ、その様子から家族の絆を感じてやりがいを抱くというものである。また、「3 要介護者・周囲から感謝」では、要介護者や周囲から、感謝の気持ちが示されることでやりがいを感じるものである。また「4 やりがいがない」は、やりがい自体を認知していない状態である。

このやりがいでは、親子間介護に携わる「娘」と「嫁」とにおいて違いが見られた。すなわち、「娘」は、「1 気持ちよさそうにしている」ことでやりがいを感じる事が多く、逆に、「嫁」は、「3 要介護者・周囲から感謝」されることでやりがいを感じる事が多かった。

「娘」が多くあげていた、「気持ちよさそうにしている」というのは、非常に主観的な認知である。たとえ、同じ状態の要介護者を見ていても、「気持ちよさそうにしている」と感じるか否かは、見る者によって異なる。さらに、そのような認知によって介護することに「やりがい」を感じるのは、個人的要因、すなわち、共感性や役割取得能力の高さ等はもちろんのこと、要介護者と情緒的に親密な間柄にあることによると思われる。そもそも、主観的な認知を介在させた他者とのコミュニケーションの代表的なものとして、乳児の表

情にたいして適切に応答する母親の能力、すなわち、情動応答性によるコミュニケーションがあげられよう。言語的なコミュニケーションが可能な被介護者の場合と、ほとんど、あるいは全く不可能な被介護者の場合とでは、コミュニケーションのあり方はかなり異なると思われる。後者の場合は、より主観的な、母親の情動応答性によるコミュニケーションに近いやりとりが生じるのではないだろうか。こうした能力がもとなるような認知は、男性よりは女性が、また、義理の関係よりは実子の方が生じやすいであろう。結果として「娘」に多かったのはそのようなことが原因として考えられる。

本研究では、介護者が「娘」である場合にこのような反応が多く見られたが、「娘」に限らず、こうした認知の仕方が、介護状況など、他の要因に影響を及ぼすといえるかどうか、今後の研究で明らかにしていく必要があるだろう。

また、「嫁」は、「3 要介護者・周囲から感謝」をあげていた。すなわち、自分がやっていることを要介護者や周囲の感謝の言葉をとおして、自分の労を認めもらったことが、やりがいにつながっていることがうかがえる。「嫁」介護の場合、多かれ少なかれ、息子である夫の親孝行を代行するといった構造が存在している。そこでは、夫や夫のきょうだいといった周囲のもの、そして、要介護者からの感謝の言葉を通して、自分が認められることがやりがいにつながっていると考えられよう。

「介護に対する感想」では、「1 当たり前のことをしている」「6 最後までお世話したい」といった、肯定的な感想は、配偶者間で介護している「夫」や「妻」の方が多く抱えており、「3 もう少し手伝って欲しい」「4 不公平を感じる」といった、否定的な感想では、親子間で介護している「息子」「娘」「嫁」の方が多く選択していた。続柄による選択傾向に違いはみられたものの、ここでは今後の他の要因とあわせて、これらの感想が分かれる要因について、さらに分析すすめていく必要があるだろう。

(4) 介護サービスへの態度

「現在の介護ができなくなった時」、また、「自分が要介護者になった時に、どのような介護になると思うか」という点で、介護サービスに対する態度を明らかにした。

まず、「現在の介護ができなくなった時どうなると思うか」では、配偶者間介護に携わる「妻」よりも「夫」の方が、また、親子間介護に携わる「息子」が、「1 家族が介護できる」「市役所・町役場に相談したい」を一層挙げていた。また、「娘」は、有意水準には満たなかったものの、「4 ヘルパー・家政婦を利用したい」「7 ケアマネージャーに相談したい」を一層挙げていた。さらに、「嫁」は、「8 福祉施設を利用したい」を一層挙げ

ていた。同じ様な傾向は、「自分が要介護者になった時に、どのような介護になると思うか」でも認められた。すなわち、「息子」は、「1 自宅で家族に」を、また、「娘」は、「2 自宅で他人に」を、さらに、「嫁」は、「3 施設」への希望を強く抱いていた。

本来、介護保険制度の主旨は、介護サービスを導入することで、なるべく住み慣れた自宅で介護できるよう支援するものである。すなわち、本調査では、「2 自宅で他人に」という項目がその主旨に合致するものといえよう。分析の結果では、「娘」が、介護保険制度の主旨に合致する意向を示すことが明らかになった。その理由として、娘が行っている介護と介護保険がめざすこれからの介護との間にある共通点を考えることができよう。すなわち、娘は、旧来の家族制度から離れた形での介護を行っているからということである。伝統的な家制度では、財産相続、親世代との同居、親の介護は一体となって長男、もしくはそれに代わる「跡継ぎ」の役目と決まっていた。「息子」「嫁」といった「息子世帯」による介護は、多かれ少なかれ、そうした伝統の中でなされている場合が多い。女性の平均寿命が男性を上回っている現在、多くの男性は、配偶者に看取られ、また、多くの女性は、先に配偶者に先立たれた上での老後を考えることが多いと思われる。そうした中で、将来、自分が要介護者になったとき、多くの男性は、妻によって、自宅で看取られることを期待することが多いだろう。また、多くの女性は、夫に先立たれた後は子どもに頼らず、「施設」を利用することを考えることが多いのではないだろうか。「自宅で他人(介護サービス利用)に」介護を受けるということは、まだ始まったばかりのことである。これまでの家族制度から離れた形で、現在、親の介護を行っている「娘」の中には、そうした、新しい形での介護形態を取り入れており、将来の自分自身の被介護意向にも反映しているものと思われる。

本調査は、平成13年度関西大学重点領域研究による助成をうけて行われたものである。ご協力いただいた回答者の皆様をはじめ、調査票配布にご協力いただきました自治体の介護保健担当ならびに介護サービス事業者の皆様には心よりお礼を申し上げます。

参考文献

- 荒井由美子 1998 Zarit 介護負担スケール日本語版の応用 医学のあゆみ、186、13、930-931。
荒井由美子・鷺尾昌一・三浦宏子・工藤啓・佐直信彦 1999 障害者高齢者を介護する者の負担感—脳卒中患者介護者の負担感を中心として— 精神保健研究、45、31-35。
藤田利治・石原伸哉・増田典子・榛澤ゆかり・森千代子・難波貴代・太田英代・萱島伸子・児玉寛子・橋本

- 修二・母里啓子・尾崎米厚・蓑輪真純 1992 要介護老人の在宅継続の阻害要因についてのケース・コントロール研究 日本公衆誌、9、687-695.
- 春日キスヨ 2001 介護問題の社会学岩波書店.
- 唐沢かおり 2001 高齢者介護サービス利用を妨げる家族介護者の態度要因について 社会心理学研究、17、1、22-30.
- 木之下明美・朝田隆 1999 在宅痴呆性老人に対する介護に関わる社会・家庭的負担評価票（CBS）の作成とその臨床的意義の検討 老年社会科学、21、1、76-85.
- Lazarus. R.S., & Folkman. S. 1984 Stress, appraisal, and coping. 本明寛・春木豊・織田正美訳 ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究— 実務教育出版.
- 中谷陽明 1992 在宅障害老人を介護する家族の“燃えつき” —“aslach Burnout Inventory” 適用の試み— 老年社会科学、36、15-26.
- 岡林秀樹・杉澤秀博・高梨薫・中谷陽明・柴田博 1999 在宅高齢者の主介護者における対処方略の構造と燃えつきの効果 心理学研究、69、489-493.
- 岡本多喜子 1989 精神症状に問題のある老人の介護者にみる社会福祉サービスの利用要因 社会老年学、29、44-50.
- 坂田周一 1989 在宅痴呆老人の家族介護者の介護継続意志 社会老年学、29、37-43.
- 新名理恵 1991 在宅痴呆老人の介護負担感：研究の問題と今後の展望 老年精神医学雑誌、2、754-768.
- 冷水豊 1982 障害老人をかかえる家族における福祉サービス利用希望の規定要因 社会老年学、16、10-19.
- 高木修 1982 順社会的行動のクラスターと行動特性 年報社会心理学、23、135-156.
- 高木修 1992 米国における向社会的行動の分類学的研究(2)向社会的行動についての規範的態度 関西大学社会学部紀要、23、2、75-106.
- 高木修 1997 援助行動の生起過程に関するモデルの提案 関西大学社会学部紀要、29、1、1-21.
- 高橋正人 1988 老夫婦の社会福祉サービス利用を規定する要因：サービス利用と子への援助期待との関連を中心に 老年社会科学、10、1、60-70.
- 横山美江 1993 a 在宅要介護老人の介護者における疲労感の計量研究 看護研究、26、5、427-433.
- 横山美江 1993 b 在宅要介護老人の介護者における蓄積的疲労徴候と介護環境要因 日本看護研究学会雑誌、16、3、23-31.
- 東京都台東区 1999 台東区高齢者等の実態に関する調査報告書.
- 愛知県・名古屋市 1997 高齢者健康実態調査報告書.
- 東京都新宿区 1999 高齢者等実態調査報告書.
- 高齢社会をよくする女性の会 1998 女性の視点から家庭介護についての実態調査—10年目の追跡—.
- 健康保険組合連合会 2000 痴呆性（ぼけ）老人をかかえる家族全国実態調査報告書.